

待兼山遺跡 II

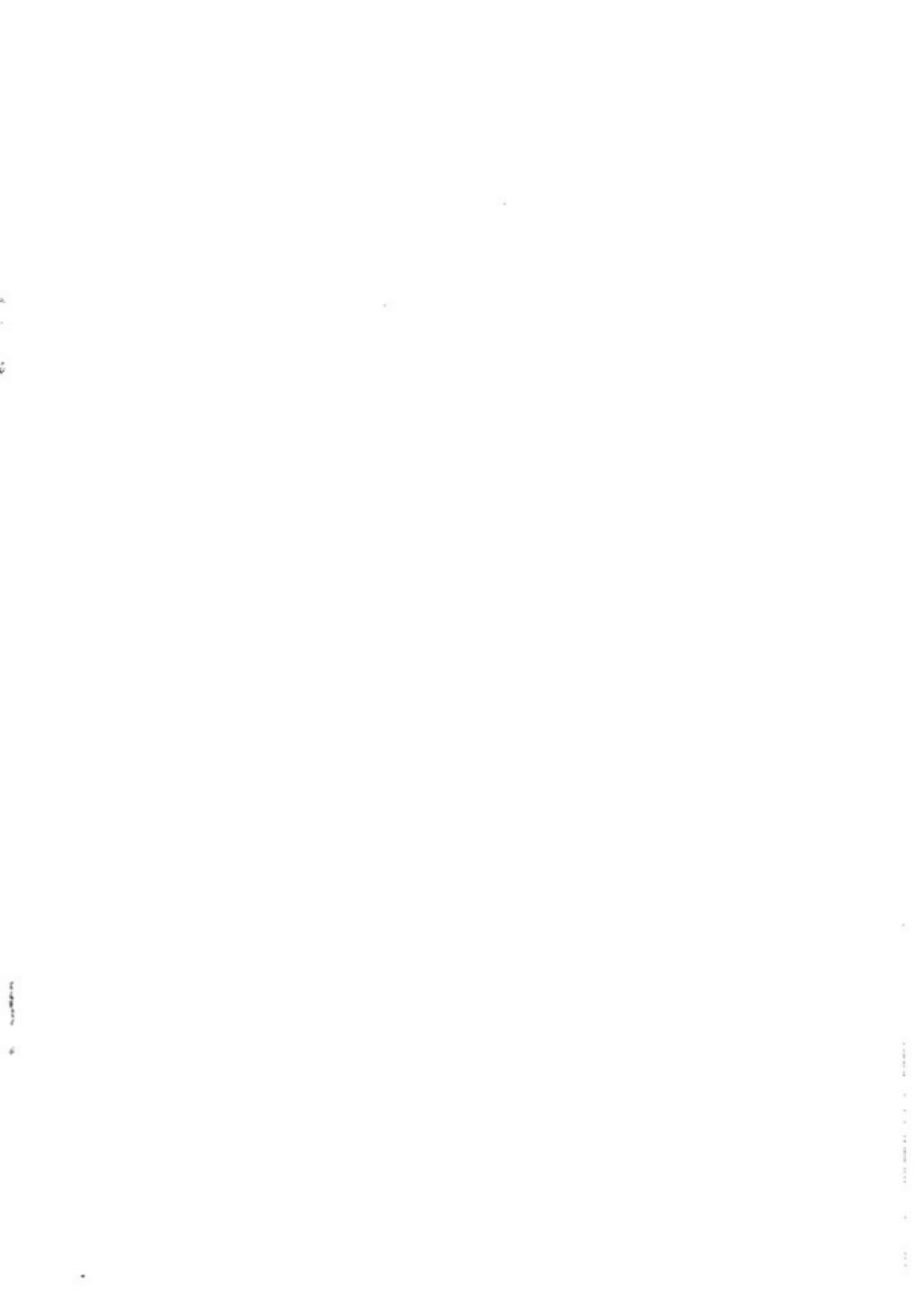
1988年3月

大阪大学埋蔵文化財調査委員会

待兼山遺跡 II

1988年3月

大阪大学埋蔵文化財調査委員会



序　　言

大阪大学の吹田地区キャンパスおよび豊中地区キャンパスは、ともに大阪府北部の、平野から北摺丘陵にかかる地帯にあり、このうちとくに豊中地区は埋蔵文化財を含む地帯として、戦前から考古学研究者のなかでは知られていた。しかし、十分な調査もないままに、この地区に大阪大学の建物がつぎつぎに建築されるにつれ、近年諸所で遺跡・遺物が発見されたので、1985年10月、学内の全学委員会として「大阪大学埋蔵文化財調査委員会」が設置された。そして、その責任のもとでのはじめての調査報告書として、テニスコート予定地および極限物質研究センター予定地の発掘調査の成果が『待兼山遺跡Ⅱ』としてまとめられた。これは、先年おなじく大阪大学豊中地区での発掘調査の成果をまとめた大阪大学待兼山遺跡発掘調査団編『待兼山遺跡』(大阪大学、1984年)に続くものである。当委員会としては、大学が公的に設置した全学委員会によって、早速このような成果がまとめられたことを、まず喜びたい。そしてそれとともに、学内埋蔵文化財調査委員会の設置に積極的に理解と尽力を示された熊谷信昭総長をはじめ関係諸部局とくに施設部の方々に、謝意を表したい。ことに熊谷総長が、テニスコート予定地の発掘調査公開説明会のとき、わざわざ多数の見学者とともに参観され、成果の説明に逐一関心を示されたことは、当委員会を勇気づけるものであった。科学的成果の尊重は、埋蔵文化財の調査と保存について学内外の関心を高める上で、大切なことであるからである。

本キャンパス内には、今後ともまだ多くの遺跡が発見される可能性がある。建設と埋蔵文化財の調査・保存とは、時としてわれわれを難間に陥れることもあるが、今後とも適正に解決して当委員会の任務を全うし、調査の成果を斯学関係者に活用していくだけよう、念願するものである。

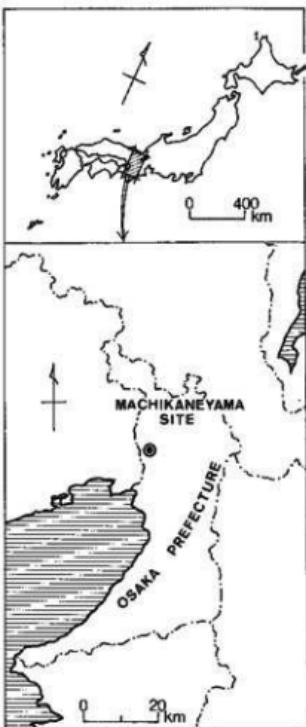
1988年3月

大阪大学埋蔵文化財調査委員会

委員長 黒田俊雄

例　　言

- 1 本書は大阪府豊中市待兼山町1番1号、大阪大学石橋団地内に所在する待兼山遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は大阪大学テニスコートおよび、大阪大学極限物質研究センター建設工事に伴う事前調査として実施したものであり、構内の建設工事に係わる文化財関係の調査次数としては、それぞれ第5次、第7次にあたる。
- 3 調査主体は大阪大学(総長熊谷信昭)である。
- 4 調査は大阪大学埋蔵文化財調査委員会専門委員都出比呂志(文学部助教授)、同福永伸哉(文学部助手)が担当し、調査員として大阪大学大学院文学研究科博士課程青谷尚英、同松木武彦、調査補助員として大阪大学学生が作業に従事した。
- 5 調査期間はテニスコート用地内が1987年1月6日～2月10日、極限物質研究センター用地内が同年6月10日～7月1日である。
- 6 調査参加者名、遺物の整理および製図の担当については、第1章および挿図目次に記す。写真の撮影は福永が担当した。
- 7 本書におけるレベル高はすべて海拔(T.P.)を示す。
- 8 本書の執筆は、第1章の1を青谷、第1章の2を都出、第2章の3(Li器)、第3章の3(石器)、第5章を松木、第1章の3、4、5、第2章の1、2、3(石器以外)、第3章の1、2、3(石器以外)、第4章、第6章を福永が担当した。
- 9 英文抄訳は都出が担当した。
- 10 本書の編集は都出の監修を受けて福永が担当した。



待兼山遺跡の位置

待兼山遺跡 II

目 次

序 言

例 言

第1章 調査経過 1

1 周辺の遺跡.....	青谷 尚美	1
2 キャンパスにおけるこれまでの調査.....	都山比呂志	4
3 テニスコート用地内の調査経過.....	福永 伸哉	6
4 極限物質研究センター用地内の調査経過.....	"	7
5 謝 辞.....	"	8

第2章 テニスコート用地内の調査成果 11

1 試掘調査の概要.....	福 永	11
2 発掘調査の所見.....	"	11
3 出土遺物.....	福永・松木	14
4 小 結.....	福 永	19

第3章 極限物質研究センター用地内の調査成果 22

1 試掘調査の概要.....	福 永	22
2 発掘調査の所見.....	"	22
3 出土遺物.....	福永・松木	24
4 小 結.....	福 永	27

第4章 大阪大学構内の埋蔵文化財 福 永 29

第5章 畿内における輶形埴輪の変遷 松木 武彦 33

第6章 総 括 福 永 48

英文抄訳 都 出 53

図 版

図 版 目 次

- 1 1 造成中の農中キャンバス
- 2 調査地点の旧状
- 2 1 テニスコート地点からの眺望（南方向）
- 2 2 テニスコート地点調査前の状況
- 3 1 テニスコート地点Ⅰ区全景（西から）
- 2 I-D区東壁土層
- 3 I-D区北壁土層
- 4 1 テニスコート地点Ⅱ区全景
- 2 III区全景
- 3 遺物出土状況
- 4 同 上
- 5 1 極限物質センター地点調査前の状況
- 2 極限物質センター地点III区南北断面（東から）
- 6 1 極限物質センター地点II区
- 2 極限物質センター地点II区東西断面（南から）
- 7 1 極限物質センター地点II区円筒埴輪出土状況
- 2 同 上
- 8 1 テニスコート地点円筒埴輪(1)
- 2 テニスコート地点円筒埴輪(2)
- 9 1 テニスコート地点円筒埴輪(3)
- 2 テニスコート地点円筒埴輪(4)
- 10 1 テニスコート地点朝顔形円筒埴輪
- 2 テニスコート地点家形埴輪
- 11 1 テニスコート地点輦形埴輪
- 2 同裏面
- 12 1 テニスコート地点弥生土器(變)
- 2 同口縁部
- 13 1 テニスコート地点弥生土器(底部)
- 2 テニスコート地点弥生土器(器台、高杯)
- 3 テニス、極限両地点の石器(A面)
- 4 テニス、極限両地点の石器(B面)
- 14 極限物質センター地点円筒埴輪(1)

- 15 1 極限物質センター地点円筒埴輪(2)
 2 極限物質センター地点円筒埴輪(3)
- 16 1 円筒埴輪細部
 2 豊中キャンバス内採集遺物

挿 図 目 次

待兼山遺跡の位置	ページ
図1 待兼山丘陵周辺の遺跡分布図(松木製図).....	(2)
図2 テニスコート地点調査風景.....	(9)
図3 同現地説明会風景.....	(9)
図4 調査後のテニスコート地点.....	(9)
図5 熊谷紹長、調査現場に.....	(9)
図6 テニスコート地点発掘区平面図(平田製図).....	(13)
図7 円筒埴輪実測図(山田・松木製図)	(15)
図8 形象埴輪実測図(山田・松木製図)	(16)
図9 須恵器実測図・拓影(中村・松木製図)	(17)
図10 弥生土器実測図(松木製図)	(18)
図11 石器実測図(中村製図).....	(19)
図12 極限物質センター地点発掘区平面図(清家製図).....	(23)
図13 III区皿状ピット.....	(24)
図14 円筒埴輪実測図(山田・松木製図)	(25)
図15 須恵器・瓦器実測図(山田製図)	(26)
図16 石鐵実測図(禹製図)	(26)
図17 医短構内古墳地形測量図(大庭製図).....	(29)
図18 豊中キャンバス内遺跡分布図(禹製図).....	(30)
図19 豊中キャンバス内出土遺物実測図(禹製図).....	(31)
図20 墓内出土の輦形埴輪(1)(松木製図)	(34)
図21 墓内出土の輦形埴輪(2)(松木製図)	(37)
図22 錫の諸型式(松木製図)	(40)
図23 上層断面集成図(吉沢製図)	(49)
図24 調査区全体図(杉井製図)	(51)

表 目 次

表1 輛形埴輪に描かれた錫と実物の錫の時期的対応関係.....	(39)
---------------------------------	------

第1章 調査経過

1 周辺の遺跡

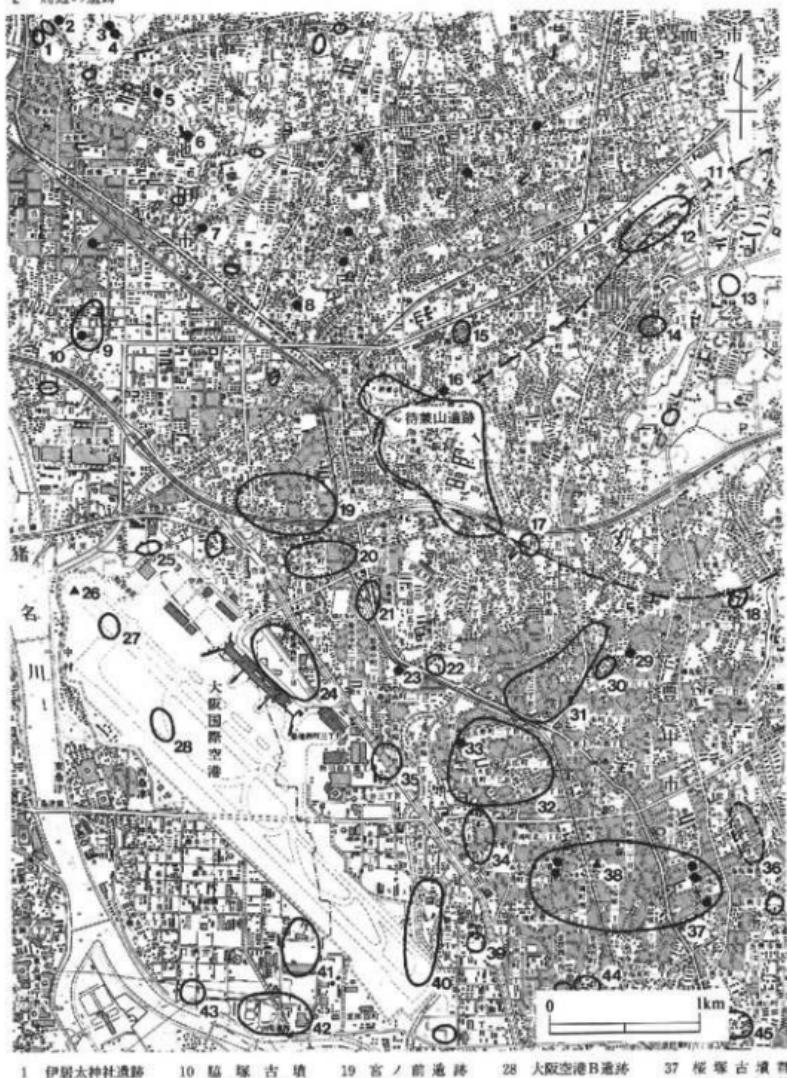
待兼山遺跡は千里山丘陵の西端、待兼山の丘陵上に位置する。待兼山は古来、歌枕として人々に親しまれ、枕草子の「山は」の段にも「山はをくら山、かせ山……まちかね山」と紹介された名所であった。丘陵の南西には西折平野がひろがり、平野東部には丹波山地に源を発する猪名川が、大阪湾へと南流している。この猪名川の流域、すなわち沖積平野やそれをとり囲む丘陵、山麓などは、旧石器時代より常に人々の生活、活動の場であった。待兼山遺跡もその豊かな歴史の流れの中に位置付けられるものである。ここでは当遺跡の周辺地域、主として待兼山丘陵とその近辺について、考古学的な見地からその歴史的環境を概観する。

縄文時代以前 この地域に最初に姿をあらわした人々の足跡は、豊中市柴原遺跡や螢池西遺跡、池田市宮ノ前遺跡などで確認されている。柴原遺跡は当遺跡の東南、千里川右岸の中位段丘上に、宮の前遺跡は丘陵の西側の台地上、また螢池西遺跡は宮ノ前遺跡の南の低地にそれぞれ位置し、これらの遺跡から出土したナイフ形石器は、当遺跡周辺地域の歴史が旧石器時代に遡ることを示している。

縄文時代前期になると、丘陵の北側の台地上に箕面市瀬川遺跡が現われる。つづく中期には、千里川右岸に墓域と想定されている豊中市野畠春日町遺跡が出現し、対岸には中期末～後期にかけての遺跡である豊中市野畠遺跡がある。柴原遺跡や野畠春日町遺跡では晩期の土器が出土し、豊中市上野遺跡では石器の散布がみられる。

弥生時代 弥生時代に入ると、まず平野部に立地する遺跡の数が増加する。前期に出現する遺跡としては、猪名川本流に沿った沖積平野の尼崎市田能遺跡や、猪名川の一支流、千里川水系の豊中市勝部遺跡が代表的であり、これらの遺跡は中期へと継続して拠点的な大規模集落になるものである。また千里川をさかのぼった丘陵上には豊中市山ノ上遺跡が、さらに奥深く丘陵内に入った所には野畠春日町遺跡があり、弥生前期の土器とともに縄文晚期の土器が混在して出土している。中期初頭には、方形圓溝墓の研究史上著名な宮ノ前遺跡の形成がはじまる。宮ノ前遺跡は箕面川水系の拠点集落であり、三島平野から西国街道を通って西折平野に入る交通の要衝を占める。また中期中葉に開始する高地性集落である待兼山遺跡は、この宮ノ前遺跡の分枝集落と考えられる。宮ノ前遺跡の南には、宮ノ前遺跡の住居域である可能性をもつ螢池北遺跡があり、このほか千里川水系には豊中市新免遺跡や箕輪遺跡、野畠遺跡などがある。平野部では、勝部遺跡と田能遺跡の中間に、原田西遺跡(豊中市・伊丹市)が出現する。弥生後期には、前期以来、地域の中心的集落としての役割をになってきた田能遺跡や、中期以来の新免

2 周辺の遺跡



- | | | | | |
|-----------|------------|------------|------------|------------|
| 1 伊居太神社遺跡 | 10 隆塚古墳 | 19 宮ノ前遺跡 | 28 大阪空港B遺跡 | 37 桜塚古墳群 |
| 2 紅葉古墳 | 11 桜井谷古墳群 | 20 貝池北遺跡 | 29 金寺山廃寺跡 | 38 原田御陣出土地 |
| 3 嫁三堂古墳 | 12 太鼓塚古墳群 | 21 貝池東遺跡 | 30 新免宮山古墳群 | 39 藤部東遺跡 |
| 4 嫁三堂南古墳 | 13 野畠遺跡 | 22 南刀根山遺跡 | 31 本町遺跡 | 40 田能遺跡 |
| 5 潤田茶臼山古墳 | 14 野畠春日町遺跡 | 23 隣神山古墳 | 32 新免遺跡 | 41 原田西遺跡 |
| 6 五月ヶ丘古墳 | 15 潤川遺跡 | 24 黄池西遺跡 | 33 新免上側古墳 | 42 田能遺跡 |
| 7 鍾塚古墳 | 16 待兼山古墳 | 25 鳥島南遺跡 | 34 山ノ上遺跡 | 43 口酒井穴森遺跡 |
| 8 二子塚古墳 | 17 柴原遺跡 | 26 中村副葬出土地 | 35 穴輪遺跡 | 44 曾根遺跡 |
| 9 神田遺跡 | 18 上野遺跡 | 27 大阪空港A遺跡 | 36 下原古窯跡群 | 45 城山遺跡 |

図1 待兼山丘陵周辺の遺跡分布図

遺跡、竈池西遺跡などが継続するほか、主として猪名川下流域の低地に、遺跡が多く分布するようである。また刀根山丘陵の南西端部から後期の壹棺が出土した(南刀根山遺跡)との報告があるが、詳細については定かでない。

弥生時代の祭祀を考えるための貴重な資料である銅鐸も待兼山遺跡から距離的に比較的近い地点でいくつか発見されている。北摂山麓の箕面市如意谷、猪名川の沖積平野上の伊丹市中村、豊中台地の豊中市原田などが周辺地域の主な銅鐸出土地であり、この時代の地域社会について考える上で欠かせない資料となっている。

古墳時代以降 古墳時代になると、西摂平野を望む山麓部や丘陵端部に、前期古墳が築造されるようになる。待兼山丘陵北縁の尾根上には幕中市待兼山古墳が、刀根山丘陵の南西端部には豊中市御神山古墳が築かれ、これらの前方後円墳からは鏡や碧玉製腕飾類が出土している。このほか、猪名川東岸の前期古墳としては、五月山の山麓および南に続く丘陵上に池田市娛三堂古墳や茶臼山古墳がある。

四世紀後葉には、豊中市大石塚古墳、小石塚古墳が築造され、これ以降五世紀末にかけての百年間に、豊中市桜塚古墳群が形成される。前期古墳が各丘陵や山麓に分散して造られたのに対し、猪名川東岸の中期古墳はこの豊中台地上の桜塚古墳群に集中して築造され、ここにも前期古墳と中期古墳のあり方の違いを見ることができる。古墳群を構成しているのは中、小規模の前方後円墳、円墳、方墳であるが、甲冑をはじめとする武具・武器類の保有量の多さは、被葬者像を考える上での一つのポイントである。かつては36基存在したといわれる古墳も、今では大石塚古墳、小石塚古墳、大塚古墳、御獅子塚古墳、南天平塚古墳の5基を残すのみとなつた。なお、山ノ上遺跡では古墳群と同時期の集落が発見されており、両者の関係が注目を集めている。

古墳時代後期の古墳は、またそれぞれの地域に分散して造られるようになる。当遺跡の東北、千里川北岸の丘陵や台地上には、豊中市太鼓塚古墳群や野畠春日町古墳群があるが、かつては30基余りあったと伝えられる古墳のうち、調査されて実態が明らかになっているものは数基にすぎない。これらの古墳群、特に太鼓塚古墳群は埋葬施設に陶棺を用いており、桜井谷古窯跡群との密接な関係が考えられている。桜井谷古窯跡群は千里川上流の谷一帯にひろがり、その分布地域には、大阪大学豊中キャンパスも含まれる。吹田古窯跡群とあわせて千里古窯跡群とも呼ばれ、和泉・阪南丘陵の陶邑古窯跡群とならぶ、須恵器の大生産地帯である。古墳時代から奈良時代にかけて須恵器や瓦を生産したこの窯跡群は、倭の漢卓の一族である桜井宿禰によって統率された工人群団によると考えられている。同じく千里川水系で窯跡群の下流に位置する柴原遺跡、本町遺跡、新免遺跡では多量の須恵器が出土しており、須恵器を生産し、運搬して出荷する役割を果した集落ではないかといわれている。

その他、周辺地域の後期古墳としては、千里川東岸の丘陵尾根上に豊中市新免宮山古墳群が

4 キャンパスにおけるこれまでの調査

あり、このうちの一つの古墳からは陶棺が出土している。また北摂山地の南、箕面川以北の地域では、池田市二子塚古墳や大規模な横穴式石室で有名な池田市体塚古墳をはじめ、20基近くの古墳が点在するが、十分な調査を経ずに破壊されたものが多く、その実態を詳しく把握することは困難である。

なお、近年の発掘調査によって、墳丘が削平された中期以降の古墳も発見されており、宮ノ前遺跡や豊中市利脊南遺跡では方墳群が、轟中市鷹積遺跡では円墳が確認されている。さらに今後の調査の成果に期待したい。

七世紀には各地における占墳造営は終わりをむかえ、寺院の建立が開始される。この地域でも豊中市金赤山庵寺が新免宮山古墳群に隣接して造られており、古墳群と寺院との関係が一つの論点となっている。

柴原遺跡や勝部遺跡で奈良時代の櫛立柱建物が検出されているほか、重圓文瓦や帶金貝、皇朝十二銘などが出土した豊中市上津島南遺跡は、中央政府と関連を持つ奈良・平安時代の館跡と推測されている。また山ノ上遺跡では平安後期の寺院の存在を示唆する梵字瓦を含む瓦当類が出土し、西国街道沿いに位置する宮の前遺跡では、平安・鎌倉時代の住居址が確認されている。

なお、1578年に荒木村重を討つために織田信長が兵をおいたとの記録がある刀根山城は、まだその所在地が確定されていないが、地名から考えて当遺跡周辺の丘陵上と思われる。

2 キャンパスにおけるこれまでの調査

過去の調査 大阪大学豊中キャンパスのある待兼山丘陵には、すでに述べたように多くの遺跡が存在する。このことが明確になったのは近年のことである。このうち一部の遺跡については、第二次世界大戦以前においても、考古学関係の専門家のなかでは注意されていた。しかしながら、この地域における考古学的な学術調査は十分ではなかった。

さらに大阪大学がこの地に設置される以前には、ここにIII制浪速高等学校と駐留米軍の施設があつたが、これらの建物の建設は文化財保護行政の指導が十分でない時期のものであるために、事前に発掘調査は実施されていない。今日までに我々が行った遺跡の分布調査の結果と照らし合わせると、多くの遺跡が建物建設に際して破壊されたことがわかる。この事情は大阪大学の建物建設の際ににおいても同様である。わずかに、1964年、理学部の建設現場において化石ワニが発見され、大阪大学地質学教室を中心とする調査の結果、約35万年前の、第4紀に属する保存の良好な化石であることが判明し、マチカネワニと命名されて、世界的にも貴重な資料を提供したことは有名である。

ところで、1982年10月に実施された文学部・法學部・経済学部共同講義棟の建設工事の際に、豊中市教育委員会との協議の結果、事前に埋蔵文化財の調査を行った。この結果、断面V字形の溝を三條検出し、ここに遺跡が存在することが判明した。また1983年4月には理学部ラ

ジオ・アイソトープ総合センター(R I センター)の建設予定地の立会調査において、弥生土器とともに石鎚が検出され、これを機として同年9月から10月にかけて、予定地の発掘調査が実施され、弥生時代の高地性集落の一部を確認するにいたった。これらの調査の経過と成果について1984年に刊行した発掘成果の学術報告書においてすでに述べたとおりである。¹¹⁾

大阪大学埋蔵文化財調査委員会の設置 さて以上の発掘調査は文学部の都出比呂志助教授を担当者とし、文学部国史研究室の大学院生や学生の参加をえて「待兼山遺跡発掘調査会」を組織して実施したものである。しかしながら、その後も本学の構内における建設計画は続出し、上記の調査体制では事態に対応できず、放置すれば学内の建設計画の順調な進展にも支障をきたすことが予測されるにいたった。同種の問題はこれまで他の国立大学においても生じており、いくつかの大学においては、大学内の遺跡の調査と保存の対策にあたる全学委員会を設置している。このことにかんがみ、本学においても種々の方策が検討された結果、1985年10月をもって「大阪大学埋蔵文化財調査委員会」が設置されるにいたったのである。

本委員会は本節の最後に資料として示すように、規程に基づいて設置された全学委員会であり、学内の建設に伴う遺跡の調査に関する事項について協議することとなっており、さらに委員の他、調査に関わる専門委員を置くことができることになっている。なお本報告書が関係する1987年度について委員と専門委員の名前を示すと以下のようになる。

委員長 黒田俊雄（文学部教授）

委員 当津武彦（文学部長）、小泉進（長期計画委員長・経済学部教授）、中世占幸次郎（教養部教授）、和田昭三（施設部長）

専門委員 都出比呂志（文学部助教授）、福永伸哉（文学部埋蔵文化財調査室助手）

なお、1982年以来、豊中構内において実施した調査を次数別に整理して示すと次のようになる。ただし、このなかには下水管や電気配線などの敷設時の掘削にともなう小規模な立会調査は含まれていない。

第1次調査(1982年10月)：文・法・経共同講義棟建設予定地（東西に走る3条の溝を検出）

第2次調査(1983年9月)：ラジオ・アイソトープ総合センター建設予定地（弥生時代の集落の一部を検出、弥生土器・石器が出土）。

第3次調査(1986年1月)：共同溝建設予定地・教養部（一部で暗褐色腐植土層検出、近くに遺物包含層の可能性あり）。

第4次調査(1986年11月)：共同溝建設予定地・基礎工学部前（乳母谷池周辺の旧地形残存）。

第5次調査(1987年2月)：テニスコート建設予定地（弥生時代集落および占墳の跡を検出、弥生土器および埴輪が出土）。

第6次調査(1987年4月)：文学部日本学研究棟建設予定地（一部で暗褐色腐植土層検出、近くに遺物包含層の可能性あり）。

6 テニスコート用地内の調査経過

第7次調査(1987年6月)：極限物質研究センター建設予定地（古墳の跡を検出、埴輪と須恵器が出土）。

(注)

1) 大阪大学待兼山遺跡発掘調査団編「待兼山遺跡」大阪大学、1984年。

資料

大阪大学埋蔵文化財調査委員会規程

第一条 大阪大学に埋蔵文化財調査委員会（以下「委員会」という。）を置く。

第二条 委員会は、総長の諮問に応じて本学の敷地内における施設計画に関する埋蔵文化財の発掘調査等について必要な事項を審議する。

第三条 委員会は、次の各号に掲げる委員をもつて組織する。

一 文学部長

二 長期計画委員会委員長

三 総長が必要と認めた教官若干名

四 施設部長

2 委員は、総長が委嘱する。

3 第一項第三号の委員の任期は、二年とする。ただし、再任を妨げない。

第四条 委員会に委員長を置き、前条第一項第一号から第三号までの委員のうちから互選する。

2 委員長は、委員会を招集し、その議長となる。

第五条 委員会が必要と認めたときは、委員以外の者を委員会に出席させることができる。ただし、委員以外の者は、表決に加わることができない。

第六条 委員会に、専門委員を置くことができる。

2 専門委員は、委員会の議に基づき、専門の事項を調査し、報告書の作成等を行うものとする。

3 専門委員は、総長が委嘱する。

第七条 委員会に関する事務は、施設部企画課で行う。

第八条 この規程に定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は、別に定める。

附 則

この規程は、昭和60年10月16日から施行する。

3 テニスコート用地内の調査経過

調査の契機 大阪大学では、1986年度の構内緑化事業の一環として豊中キャンパス石橋側の入口部分に庭園の造成を計画した。当該地には大阪大学体育会テニス部のテニスコートが存在

するため、これを移設する場所として大阪大学刀根山学生寮北側の丘陵上(III)刀根山学生寮跡地)が選ばれた。テニスコート造成にあたっては、表土の入れ替えなどの必要から用地内のほぼ全域にわたって削平を受けるため、当予定地約5000m²について1986年11月17日～12月3日にかけて試掘調査を行った。その結果、丘陵縁辺の旧地形が残存する部分において、円筒埴輪片、形象埴輪片、須恵器片等が出土した。これをうけて12月10日、埋蔵文化財調査委員会が開かれ、協議の結果、造成用地内のうち旧地形残存部約400m²について発掘調査を行うことになった。

調査は大阪大学埋蔵文化財調査委員会専門委員都出比吕志(文学部助教授)、榎永伸哉(同助手)が担当し、1987年1月6日～2月10日にかけて実施した。

調査参加者 青谷尚美、松木武彦、北尾悟、長谷川賢二(大阪大学大学院文学研究科)、森島康雄(大阪大学文学部OB)、福葉裕子、小藤容子、大和田淳司、植原素子、椎本祐子、小池聰樹、斎藤正徳、白谷朋世、山成孝治、杉井健、中村顕、平田洋司、清家章、大庭重信、山田雄久、中川紀子(大阪大学学生)

調査経過 1月6日から始まった調査はまず3カ所の調査区を設定し(図6)、区域内の樹木伐採を行った後、重機による表土掘削にとりかかった。調査地点にあたる丘陵は、第二次大戦後の駐留米軍宿舎造営の際に頂部が削平され、その土砂が斜面部に盛土されている。発掘当初はこの盛土をすべて重機で取り除く予定であったが、特にI区では盛土中からの遺物出土量が意外に多いことから手掘りに切り替えた。また、既に重機で取り除いた土砂についても、ふるいにかけて遺物を採集した。

II区、III区では人工的な削平が著しく、また盛土下の堆積土中に遺物が認められなかっただため、一部トレンチ調査などによって旧地形を復元するにとどめ、以後の調査はI区に重点を置いて作業を進めた。折しも学年末試験の時期と重なり、調査の遅れが危惧されたが、参加学生の献身的な作業と作業員の協力によって1月30日までに掘下げおよび精査を完了し、1月31日～2月2日に写真撮影を行った。

3日には調査成果が新聞で報道され、翌4日に現地説明会を開催した。説明会には熊谷信昭大阪大学総長をはじめ学内関係者、一般市民ら約130名の来訪を得た。5日からは実測、土層観察用の土手くずし、掘削土のふるい作業などをを行い、2月10日、一ヶ月余りにわたった現場作業をすべて終了した。

出土遺物の整理及び調査報告書の作成作業は1987年8月～1988年3月にかけて文学部考古学実習室を借用して行った。作業には発掘調査参加者の多くがあつたが、なかでも松木、杉井、平田、吉沢、大庭、清家、山田および馬在柄(文学部研究生)らが中心的役割を担った。

4 極限物質研究センター用地内の調査経過

調査の契機 大阪大学は1987年度事業として大阪大学豊中キャンパスにおいて、理学部およ

8 緒 論

び基礎工学部の共同利用施設である極限物質研究センターの建設を計画した。予定地は旧刀根山学生寮跡地の東半部、すなわち前述のテニスコート造成用地のすぐ東側の高位部である。地形的にはキャンパスのある待兼山丘陵の中の一つの頂部にあたり、先のテニスコート造成用地内の調査から推測して、更に高位の当地点にも古墳や集落跡などの存在する可能性が高いと考えられた。

1987年3月7日～18日、建設に伴って地形の改変を受ける部分約5000m²について試掘調査を実施したところ、丘陵斜面部の旧地形残存部分から石鎚、円筒埴輪片、須恵器などの出土をみた。4月30日、埋蔵文化財調査委員会が開かれ、旧地形残存部分及び遺物の散布が認められる部分約800m²の発掘調査を行うことを決定した。調査は都出、福永が担当し、期間は1987年6月10日～7月1日である。

調査参加者 松木武彦(大阪大学人文学院文学研究科)、岡林孝作(筑波大学大学院歴史人類学研究科)、竹中康彦(大阪大学文学部研究生)、小池聰樹、山成孝治、杉井健、中村顕、平田洋司、吉沢美香、渡辺直行、大庭重信、鈴木敬二、清家章、山田雄久、藤原武、米谷昭範、平井啓明、小路泰弘、中野博之、伊藤敦子、勝村聰子、河合知子、川島睦子、鳴田美紀、辻井泉子、木村憲泰、根本拓哉、吉田愛子、中川雅世、荒木孝広、橋本恭典、藤石義隆、藤田英晃、宮本真一、山元隆弘、達部耕、中花田学、米山裕二、羽場公彦(大阪大学学生)

調査経過 当地も既に駐留米軍宿舎造営の際に、丘陵頂部の削平、斜面部の盛土といった改変がなされている。調査はまずこの盛土を重機及び人力によって除去する作業から始めた。足場の悪さや、深い所で地表下2m以上におよぶ盛土のために作業は難行したが、6月16日までに概ね盛土を除去して米軍造成前の旧地表面を検出した。

17日より土層観察用の土手を残しながら掘下げていった。しかし、旧米軍宿舎(後に旧刀根山学生寮に転用)関係のコンクリート基礎、配管溝、ごみ穴などによって発掘区内の随所に搅乱が及んでいること、また、遺物の分布に極端な疎密の差があり、集中箇所が限られていることから、状況に応じてトレンチ調査に切り替えるながら作業を進めた。6月後半としては記録的な晴天続きで参加者の肉体的消耗は激しかったが、7月1日までには写真、尖測をふくめて現場での作業を無事終了することが出来た。

出土遺物の整理及び調査報告書の作成作業は1987年8月～1988年3月にかけて文学部考古学実習室を借用して行った。作業の主な参加者は前節と同じである。

5 謝 辞

調査にあたっては、多くの方々の援助を受けた。以下にその負責所を記し、心から感謝の意を申し述べたい。

まず、調査の計画、実施については、熊谷信昭大阪大学総長、埋蔵文化財調査委員会委員長

黒田俊雄氏(文学部教授)、同委員当津武彦氏(文学部教授)、小泉進氏(経済学部教授)、中世古幸次郎氏(教養部教授)、和田昭三氏(施設部長)から全般的な指導を受けた。また、施設部企画課長山本昇氏、同課長補佐清水秋治氏、同建築課長渡邊正雄氏、同課長補佐玉置俊夫氏、同建築第一掛長土居昌弘氏、同建築第二掛長小谷智彦氏には調査と建設計画との調整について尽力いただいた。さらに、施設部企画課総務掛長本田重雄氏、同掛主任櫛井康貝氏には実質的な調査準備および、現場作業の円滑化の面で多大な援助を受けた。

また、豊中市教育委員会社会教育課柳本照男氏、服部聰志氏からは調査に関する行政的な指導ならびに周辺遺跡の研究成果の教示でお世話をになった。

文学部国史研究室および教養部歴史研究室の脇田修教授、長山泰孝教授、東野治之助教授、村田路人助手、大石雅章助手からは、学問的な助言だけでなく、調査補助員の確保などの面でも援助をいただいた。

安藤建設株式会社大阪支店作業所長松村圭造氏、同主任南勝正氏、阪神興産吉川博史氏は、現場作業に関する様々な面で調査団に対して便宜をはかられた。

さらに報告書作成にあたっては、岡村勝行氏、笠井敏光氏、木下亘氏、田上雅則氏、田中晋作氏、森岡秀人氏、森田和伸氏、山元建氏および豊中市郷土資料室、芦屋市郷土資料室の諸氏から有益な教示を賜った。

なお、図版1に使用した写真については大阪大学附属図書館より提供を受けたが、その複写などの際には間覧第一掛長茂幾周治氏、同技術



図2 テニスコート地点調査風景



図3 同現地説明会風景



図4 調査後のテニスコート地点



図5 鮎谷総長、調査現場に

補佐員藤原紫朗氏のお世話になった。また、図5の写真は文学部河上哲作助教授より提供をうけた。

上記のほかにも、数多くの方々の有形無形の援助のおかげで、調査を無事終了することができたのである。氏名をあげられなかった方々に対しても、この報告書の刊行をもって、深い感謝の意を表する次第である。

第2章 テニスコート用地内の調査成果

1 試掘調査の概要

調査地は大阪大学刀根山学生寮北側の丘陵上にあり、地形的には、次章で述べる極限物質研究センター用地付近を最高所とする丘陵頂部から、西に伸びる尾根上に位置する。丘陵下の猪名川左岸平野との比高差は40~50mあり、西方および南方に開ける眺望は、六甲山東麓から西摂平野、河内平野、さらには泉州地域まで視野におさめることができる。

さて、試掘調査では約5000m²のテニスコート造成予定地内に26本のトレンチを設け、土層断面の精査と遺物の有無の確認を行った(図24)。既に述べたように当該地は、第二次大戦後の駐留米軍将校宿舎建設の際に、大規模な削平、整地がなされており、調査前にはンベルの異なる三つの平坦面となっていた。

このうち、最も高い東部平坦面には第1~第6トレンチを設定した。いずれのトレンチとも、表土直下は黄褐色ないし灰白色粘土の地山となっており、人工的に大きく削られた部分であることを物語っている。

中央部平坦面には第7~第23トレンチを設けた。第7~第12、第23トレンチでは擾乱層と地山層しか認められなかつたが、西縁辺の第13~第22トレンチには造成時の盛土層の下に旧地形がある程度残存しており、このうち第18、19、20、21トレンチからは円筒埴輪片、須恵器片などが出土した。これらは盛土中からも出土することから、本來この遺物を持っていた占墳は、米軍による造成時にかなりの部分が破壊されたものと推測されるが、墳丘下半部や周溝などの施設が残存している可能性も考えられた。

最も低位の南部平坦面には第10トレンチ南半、第24~第26トレンチを探入した。第25トレンチ西半部では表土下約50cmに旧地表面の腐植土が残存しており、埴輪片が認められた。第25トレンチ東半から第26トレンチにかけては、旧地表面が表土下100~250cm以上という深部にもぐりこんでいく。現況では盛土上で埋めつくされて平坦面となっているが、造成前には当部分は南に開く小さな谷地形をなしていたと考えられる。第26トレンチでは、旧地表面の堆積土中に有機質を含んだ土層が確認された。トレンチ内からは遺物は出土しなかつたが、今後、埋蔵文化財との関連で注意を要する堆積土である。

2 発掘調査の所見

発掘区の設定 試掘調査時の遺物出土トレンチを中心に、旧地形が残存していると推定される部分に三つの発掘区を設定した(図6)。このうち面積の最も広いI区は、調査の便宜からそ

12 発掘調査の所見

の中をさらにI-AからI-Eの5小区に分割した。以下の記述の中でAI区、B区と言うときはこの小区を示すものとする。

土層の構成 調査地の基本層序はI-D、E区東壁に良好に表われている(図23)。まず、現在の表土下には米駄留軍による丘陵削平時の盛土が存在し、この中からは円筒埴輪、形象埴輪、弥生土器などの破片が多く出土する(図23①層)。盛土下には厚さ5~10cmの黒色土層が観察され、米軍造成前のII表土と考えられる(②層)。これより下位は、基本的には淡黄色砂質土層(③層)と淡黄灰色礫混じり砂質土層(④層)で構成されるが、部分的には前者が認められない所もある。また、地山のくぼみに、④層と類似するがやや大きな砾の混じる淡黄褐色礫混じり砂質土層(⑤層)が堆積している部分があるが、遺構の埋土とは考えられない。旧表土下の③④⑤層はいずれも弥生土器、埴輪、須恵器などを包含する。ただ、④⑤層が古墳時代以前の遺物のみを含んでいるのに対して、③層と④層の境界付近から中世の陶器片と考えられるものがごく少量検出されていることから、③層の堆積年代は少なくともそれ以降ということになる。なお地山は黄褐色、灰白色の粘土もしくは砂礫層であり、大阪層群の一部と考えられる。

I区の調査 当区は東から西に下る尾根筋の南斜面部にあたる。堆積土を一層ずつ掘下げて地山面を検出したところ、地山面にいくつかの落ち込みが認められた。古墳に関連する遺構になる可能性を検討したが、落ち込みの多くが不整形で等高線と直交する方向に細長く伸びること、坪土が淡黄灰色礫混じり砂質土で上部の包含層と分離できることなどから、これらは、豪雨などの際に斜面部に一時に形成された流路に土砂が流れ込んだものと判断した。

遺物はC、D、E区に集中する傾向がみられる。遺物に関しては次節で詳しく述べるが、古墳時代中期の埴輪と弥生時代後期の上器が中心的である。多くは地山直上層から出土するが基本的には混在状況にある。これは、尾根上に営まれた弥生時代後期の集落址のごく近辺に、あるいはこれと重複して古墳が築造された後、弥生土器を含む埴輪盛土が流出し堆積した結果と解釈できる。ただ、1個体に近い数の上器片が比較的狭い範囲から検出された部分もあり、層位的には分離し得なかったが古墳築造以前に堆積した土砂もいくらか存在するようである。

II区、III区の調査 両区とも尾根北斜面部にあたるが、削平が著しく、旧地形は殆ど残存していない。II区は東北隅に辛うじて地山傾斜がみられるのみで、他の部分は削平後の地山面、または擾乱である。III区は発掘区北辺にIII地形の地山傾斜が認められるが、地山上に堆積している橙褐色砂質土層は極めて堅く締まっており、I区やII区では観察されない上層である。遺物は含まれず、弥生時代以前の堆積土かとも思われるが確たる根拠はない。

遺物はII、III区とも表土中からわずかに埴輪片を検出したのみである。尾根頂部に遺跡が存在するなら、地形的にみてこの尾根北斜面にも遺物を含む土砂が堆積していることは確実であるが、今回の調査地内では残念ながら削平されつくしているようである。さらに斜面下方部の中山池周辺にかけて、包含層の存在が予測される。

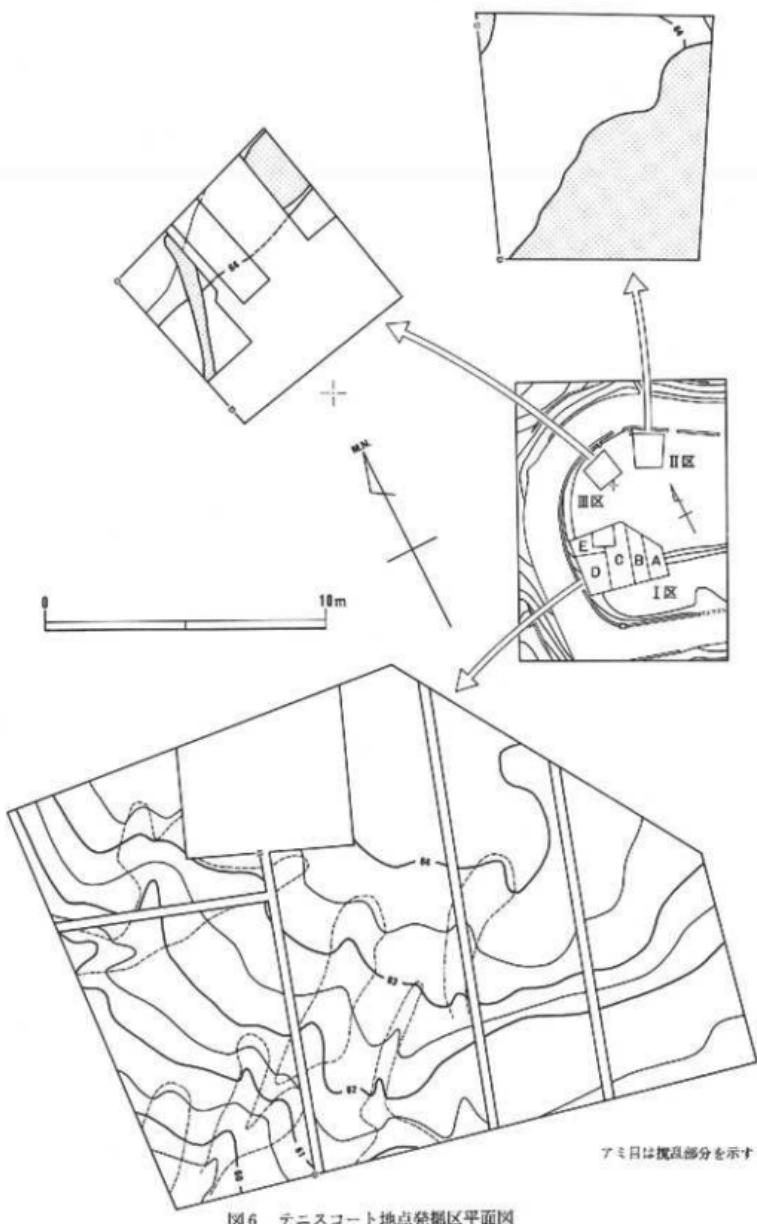


図6 テニスコート地点発掘区平面図

3 出 土 遺 物

出土遺物には弥生土器、石器、円筒埴輪、形象埴輪、須恵器などがある。すべて丘陵斜面の堆積土および盛土中から出土したが、量的にもっと多いものは円筒埴輪、形象埴輪である。このほか中世陶器と考えられる土器片もごく少量認められたが、器形などは不明である。

円筒埴輪(図7、図版8~10, 16) 円筒埴輪には普通円筒と朝顔形円筒がみられる。器表面の風化の激しいものが多く詳細な観察は難しいが、形態や調整の特徴からみて、次の2種類に大別できる。

A類 器壁が比較的厚く、断面台形のタガを有し、いわゆる一次調整にタテハケ、二次調整にヨコハケを施すもの(1~6, 8~13)

B類 器壁が薄く、端面のくほんだ低いタガないし断面三角形の小さなタガを有し、外面のハケメ調整はタテハケ、ナナメハケのみで二次調整を行わないもの(7, 14~16)

A類は口縁部径25~30cm程度、底部径20cm程度で底部から口縁部に向かって開く形態が推定されるが、小片からの復元が多く、この数値には誤差が含まれている。器高や段数などは不明。透孔は円形が殆どであるが、1例だけやや崩れた三角形と考えられるものがある。タガは断面台形で太さ1cm余りのものが多いが、2cmほどの太いタガもある。器壁からの突出度は0.8~1cmを計る。タガの端面、上端面、下端面にはヨコナデが施されているが、特に上端面と器壁が接する部分が強くナデられ、このためにタガが斜め下方を向いている例もある。タガ間の距離のわかるものは数例しかないが、それらによると10cm程度である。外面調整はタテハケの後にヨコハケを行うもので、ヨコハケには原体を器壁上で止めながら施す技法が見られる。内面調整は観察できる部分においてはハケおよびナデである。黒斑は認められない。

B類は出土点数が少なく、詳細は明確ではないが、径は胴部において20cm前後、A類と比べてやや小ぶりで器壁も薄いようである。透孔はやや歪んで橢円形になったものが認められる。タガの断面は端面のくほんだ台形ないし三角形で太さ1cm未満、突出度は小さく、器壁からの高さは0.5cm未満である(図版16, 1~c, e)。タガ間の距離は8cm、A類よりやや短くなっている。外面調整はタテハケ、ナナメハケのみで二次調整は認められず、内面調整はナデのみが観察できる。無黒斑である。

なお、胎上、焼成などをみると、A類のなかでさらに4種類、B類のなかでは3種類の埴輪の存在が指摘できる。生産地の違い、窯の違いなどに要因が求められよう。

さて、形態や製作技法の点で大きく異なる両類であるが、数量的にみてもA類が全体の95%以上を占めるといった偏りがある。これをかつて1基の古墳が有していた円筒埴輪のあり方とみるか、B類を別の古墳からの流入と考えるかについては現時点では保留しておきたい。

形象埴輪(図8、図版10~11) 瓢形埴輪、家形埴輪、そして細片ではあるが蓋形埴輪の可能性

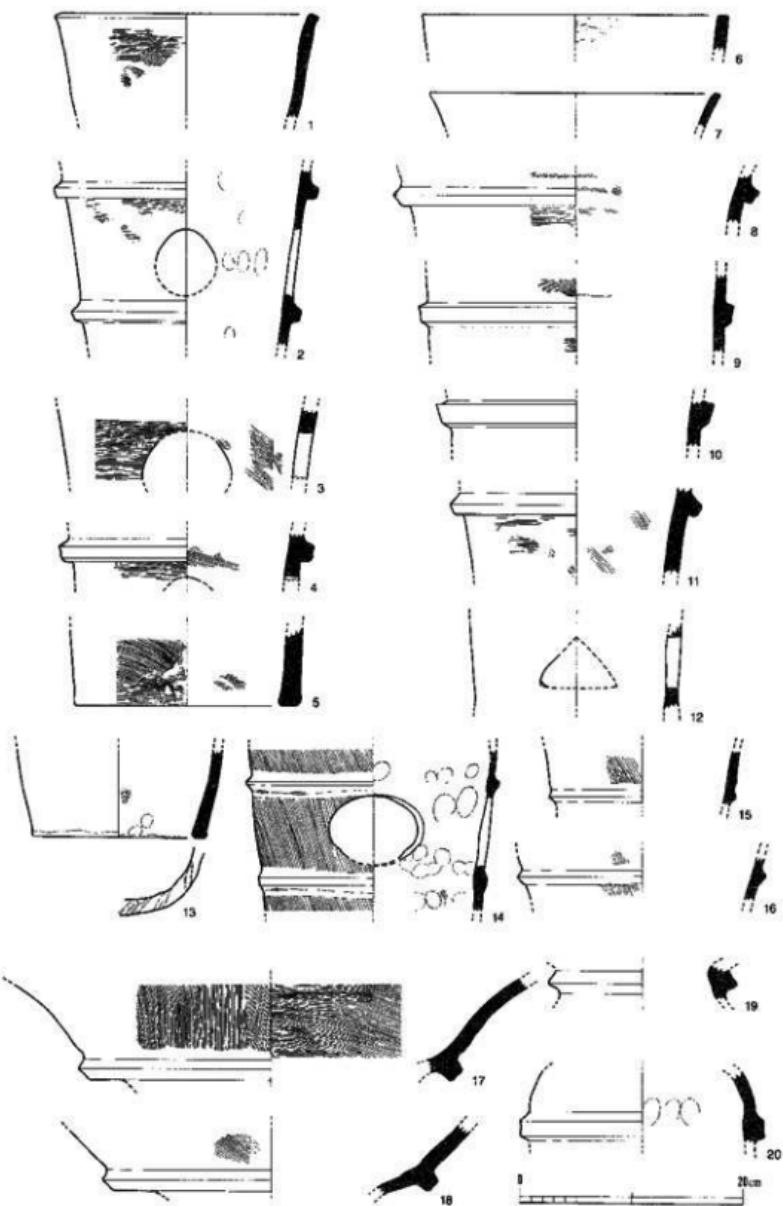


図7 円筒埴輪実測図

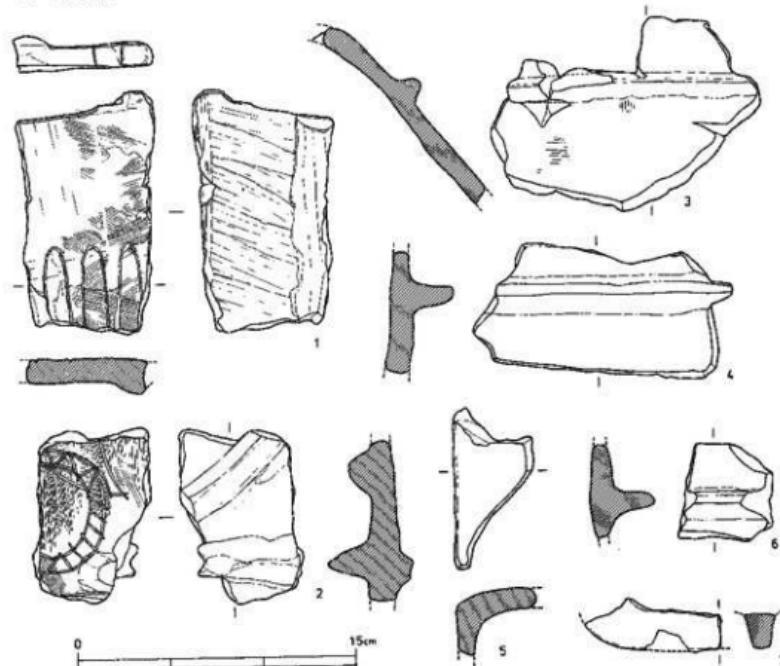


図8 形象埴輪実測図

のあるものが出土している。

図8-1、2は楕形埴輪である。1は柳葉形の縫を線刻によって表現した部分で、表面はハケ調整、ナテ調整を行った後、縁取りを施している。破片上辺は生きた面となっており、したがって、矢を入れる筋の裏板や背負い板の縁取り表現としてしばしばみられる、平行する二条の沈線間を短線で埋めた図柄などは存在する余地がない。裏面は板状工具で斜め方向にナテ調整を施し、右辺には縦方向の低い突帯状の粘土紐が貼り付けてある。2は2本の円弧状の線の間を短線で埋めたもので、筋の裏板の縁に付く背負い紐の表現かとも考えられるが、上述のように1には裏板や背負い板の縁を示す線刻表現が認められないため、これを背負い紐の部分とするなどに取り付くのか疑問が残る。裾部などに同様の表現が見られる場合もあり、そうした可能性も考えられる。胎土、焼成、調整手法などからみて1と同一個体であろう。

家形埴輪は胎土、焼成などの特徴からみて2個体の存在が認められる。一つは明瞭褐色の堅く焼き締まったもの(7)、もう一つは淡黄灰色の比較的軟質のものである(3、4、5)。なお、これらと全く同様の特徴を有する円筒埴輪が存在しており、双方の対応関係が注目される。

3は表面に一条の突帯を有し、上辺部においてやや内寄をはじめること、内面に整体部と接

続していたと思われる粘土剥離が認められることなどから、星根部と考えるのが妥当であろう。4、6は基底部であり、4には破片左端に半円形のくり込みの一部がかかる。5は壁のコーナー部、7は裾を巡る突帯が剥離したものである。

須恵器(図9) 須恵器の出土量は極めて少なく、小片が十数片ほどである。ここでは地山直上層から円筒埴輪と混在した状況で検出されたものについて述べることにする。

図9・1、2は杯である。両者とも器壁の厚さが2~3mmと極めて薄く、破断面は暗紫褐色で胎土も細かい。1は杯蓋で、復元口径は13.5cm、天井部は丸みをもつたものになるようである。天井部は回転を利用したヘラ削りの後、やはり回転を利用してナデしている。ヘラ削りは天井部と体部の境界近くにまで及ぶ。天井部と体部を区する棱は、断面形が三角形の鈍いもので、後の下部は四線状にくぼむ。2は杯身で、復元最大径14cm。底部外側は1と同様ヘラ削りの後ナデを施す。ヘラ削りは受部から8mm離れた位置まで行われている。立上がり部分は3mm程度を残して欠損しているが、やや内傾しながら立上がるようである。また、この部分の器壁は特に薄く、厚さ1mm程度である。1、2とも1回のヘラ削りの幅は7~8mmと狭い。

3、4は変形部片の外面のタタキメの拓影である。細筋の平行タタキで、内面の当て具痕はナデによってすり消してある。ごく一部でナデの下に辛うじて残っている当て具痕は、細筋の同心円文と認められる。器厚は5~8mm程度。破断面は暗紫褐色。

弥生土器(図10、図版12~13) 米軍造成時の盛土から出土した1を除いては、地山直上層からの出土である。完形に復元できるものは1個体しかなく、他は小片が多い。

完形に復元できた甕4は口径14.5cm、胴部最大径18.5cm、器高23cmを計る。くの字状に外反する口縁部から丸く肩の張った体部を経て、整った平底の底部に至る。口縁端部はわずかに上方につまみ上げており、端面はやや擬四線状にくぼむ。体部上半の外側には水平方向の粗いタタキが施されている。体部上端付近から口縁部にかけてはヨコナデが施されているが、ナデの下にはタタキメが見え隠れしており、いわゆる「口縁叩き出し技法」による成形が行われていることがわかる。体部下半はハケ調整である。底部には通常の畿内の弥生後期の甕のような上げ底状の突出はみられず、底面も極めて平滑である。内面はやや風化が進んでおり、調整などの不明瞭な部分があるが、観察しうるかぎりでは、体部下部では斜め上方に向、上部では横方向のヘラ削りが認められる。

1~3は甕の上半部である。2は推定口径17cm、くの字状に外反する短い口縁部から丸い体部に続く。口縁端面はナデによって外側にわずかな面をなす。内外面とも風化が著しいが、それを差し引いても器壁の薄さは特徴的である。胎土には極めて多量の砂粒を含む。胎土や焼

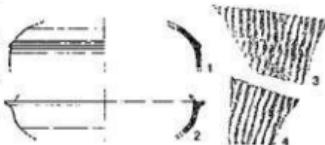
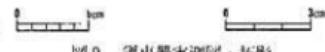


図9 須恵器実測図・拓影



18 出土遺物

成の特徴からみて底部11とは同一個体と考えられる。この底部も突出しない平底で、外面ハケ調整である点ともども4に類似する。3は推定口径14.5cm、口縁部はくの字状に外反し、張りの少ない体部に継ぐ。やや幅広の口縁端面はナデによって凹面となっており、結果的にわずかに下方にも拡張される。外面には右上がりの粗いタタキが施されている。諸特徴の類似から、底部12と同一個体である可能性が高い。内面調整は風化により不明。

5は高杯の脚柱部、内面に絞り目が残る。

6、7は同一個体と考えられる。口径、底部径はそれぞれ31cm、24.5cmと推定され、口径が底部径を凌駕する器台であろう。口縁端部は下方に拡張され、4条のやや浅い凹線をめぐらす。底部はラッパ状に開き、端部は面をなす。円形の透孔が三方に穿たれる。

8～12は煮、甕の底部である。9は細頸壺の底部であろう。10は暗褐色の胎土で河内地方からの搬入品と考えられる。

石器(図11、図版13) B区の淡黄色砂質土より出土した。全長6.5cm、最大幅2.7cm、厚さ0.9cm、重量12.6gを計る。断面三角形の縦長剝片を直接の素材とし、各面に原面あるいは大割離面を大きく残す。調整剥離は刃部と基部に見られる。刃部は先端から基部近くまで細かい剥離を並列し、鋸歯状に仕上げる。これらの剥離は主としてB面から施されているが、一部A面から施さ

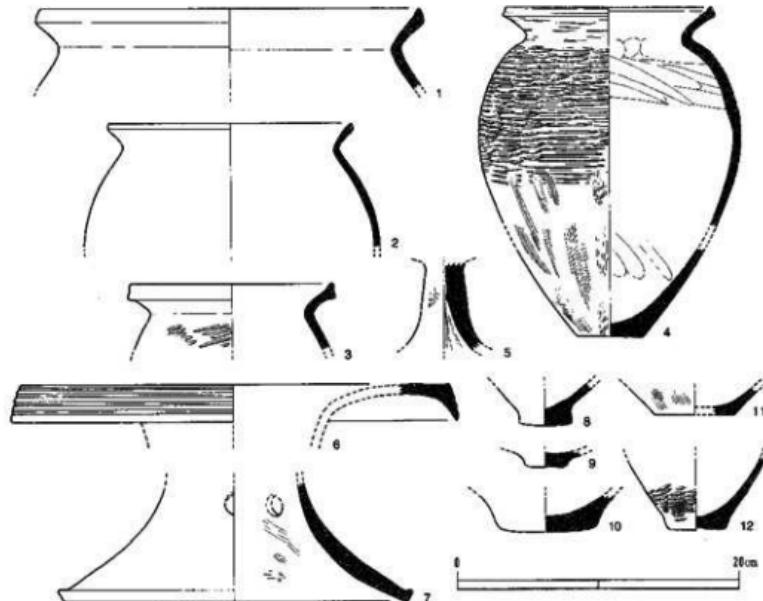


図10 弥生土器実測図

れている箇所もある。基部はA面には下方から、B面には側方からの大きい剝離が見られる。刃部には使用による磨滅、欠損は認められず、他の部分の稜線も鋭いことからこの石器はそれ程長期間使用されないで廃棄されたと考えられる。石材は肉眼観察によればサヌカイトである。正確な所属時期は不明であるが、風化がそれほど進んでいない点からみて、弥生時代のものである可能性が高い。

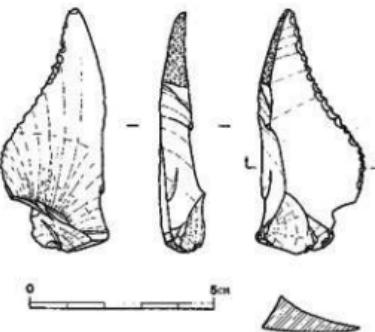


図11 石器実測図

4 小 結

テニスコート用地内の発掘調査では、当丘陵上に古墳と弥生集落がかつて存在していたことを明らかにすることができた。その本体部分は残念ながら米軍宿舎建設の際に破壊されていたが、今回の周縁部分の調査によって、ある程度その実態に迫ることができた。

まず古墳について述べると、埴輪、須恵器等の出土がI区西半部分に集中することからみて、このI区西半に近い埴輪頂部にその本体が存在していたと推定できる。細い尾根筋という地形的な制約からすると、古墳の規模は直径あるいは一辺が20m以下の小墳の可能性が高い。出土した円筒埴輪には上述したように、二次調整のヨコハケを有するものと二次調整を欠くものの二者がある。諸先学の円筒埴輪研究の成果によると、この二者の違いは、製作過程における技法の簡素化という観点から、概ね時間的変遷を反映したものと考えられている。今回の調査では斜面堆積の包含層の中に両者が混在した状態で検出されたのであるが、これらが同一の古墳のものであるかどうかは検討を要する。想定しうる状況は二つある。ひとつはこの古墳が、当地域に二次調整を欠く新しいタイプの円筒埴輪が出現する、あるいは持ち込まれ始めるまさにその時期のものと考えることである。その二は、近くに時期の下る別の古墳が存在し、その埴輪が流れ込んだ場合である。ただ、後者を考えた場合、それではどこにその古墳が存在するのかが問題になってくる。埴輪はC、D、E区という狭い範囲にのみ集中していたが、別に古墳があるならもう少し違った出土状況を示すのではないかとも考えられる。これらに伴う須恵器はごく少量検出されたのみであるが、杯のヘラ削りや甕のタタキの特徴からすると、TK208型式期前後に遡る可能性を持っている。二次調整を欠くタイプの円筒埴輪の上限は一志TK23型式期とされているが、それが各地域でどういう形で古い円筒埴輪にとってかわっていくのか（型式変化の序列として辿れるのか、突然変異なのか）依然不明瞭な点も多い。こうした重要な問題ともかかわるだけに、今回の埴輪の出土状況の解釈については、周辺の調査が進むまで今

少し保留しておきたい。

いずれにせよ以上のことから、今回存在の跡を確認した古墳は5世紀後半の小規模古墳と考えることができよう。ただ、小墳とはいって、家、瓶、蓋など一応複数の形象埴輪を備えていることは、当墳の被葬者が、畿内中央政権の影響下にあって埴輪祭礼を共有していたことを物語っている。この時期、猪名川左岸平野にあっては、桜塚古墳群という、大型円墳や前方後円墳を含む有数の古墳群が造営されている。この古墳群とわずか3kmほどしか離れていない待兼山の丘陵上の古墳がこれと無関係に存在したとは考え難い。また、豊中市城平野部でも、近年の調査で桜塚古墳群と併行する時期の小規模古墳の発見、あるいは円筒埴輪の出土が相ついでいる。⁽²⁾こうした新たな成果を取り入れて、桜塚古墳群を頂点とする猪名川左岸平野部の古墳時代中期の重層的な社会構成を復元できる日も遠くないであろう。

さて、当地点ではまた、円筒埴輪とともに弥生土器の出土をみた。量的には少ないが、壺、甕、高杯、鉢、器台など一通りの器種は揃っており、かつてこの丘陵上に弥生集落が営まれていたことは明らかである。出土した土器のなかには、畿内の通常の弥生後期の土器とはいさきか趣を異にしたものがある。タタキメがありながら、上げ底風のくぼみを持たない甕(図10-4)や口縁端面に凹線文を施す器台(6,?)などは明らかに他地方の製作技法の影響を受けている。

このうち甕4は底部の形態と内面ヘラ削りが大きな特徴であり、これと全く同巧のものは管見に触れないが、強いて言えば尼崎市田能遺跡第1B調査区出土の土器群中に類例を認めうる(同報告書 第117図-4, 5など)。田能例は全体的なプロポーションや内面のヘラ削り、外面のタテハケ等の点において待兼山例と共に通項をもつが、底部の作り方においてはやや異なる⁽³⁾。田能遺跡では、このほかに6Y調査区第2溝などでも内面ヘラ削りが施されている甕が散見するが、これは直接的には当技法をいち早く受容した播磨地方からの影響と考えられる。

器台6, 7は畿内に通有な形態ではない。類例を求めるべくすれば、兵庫県佐用郡播磨吉福遺跡土壙1、土壙5、同じく佐用郡本位田遺跡黒色シルト層下層等から出土した器台があげられる⁽⁴⁾。大きく開く口縁部の端面を下方に拡張し、凹線文を施す手法は、待兼山例と同様である。

このように待兼山遺跡出土の弥生土器には播磨地方の影響が看取できるのであるが、問題となるのはその時期である。甕4は田能遺跡例との関連を認めるとすれば、弥生後期の前半から中葉に比定できよう。ただ西摂地域においても内面ヘラ削りを施すこうした甕の動向が十分明らかになっておらず、今後の状況によっては再検討の余地もある。器台4については、本位田遺跡において共伴する土器が弥生後期後半～終末期を中心とするものであり、これに近い時期の可能性がある。待兼山遺跡の弥生土器は、丘陵斜面の包含層からの出土であり、しかも古墳の盛土に含まれていたものもあることから、括性という点では不安定なものである。したがって、現時点では当遺跡の弥生集落の時期については、概ね弥生後期中葉から終末までの範囲の中に考えておきたい。

さて、この弥生集落は既に中心部分が削平されてしまったため詳細は不明であるが、少なくとも眼下の猪名川左岸平野部と約50mの比高を有し、南方、西方に広く眺望が開ける立地は、いわゆる高地性集落の立地条件にもかなっている。高地性集落とすれば、新しい時期のものに含まれ、畿内の古墳出現直前の集団の動向を考える上で重要な事例が明らかになったといえよう。即西回街道を眼下に見下ろす交通の要衝に営まれた高地性集落に、西方の影響を受けた土器が存在することに、大きな意義を認めた。

(注)

- 1) 川西宏幸「円筒埴輪總論」(『考古学雑誌』64巻2号、1978年 p.23)。
- 2) 利倉南遺跡や新免遺跡などで削平された古墳や円筒埴輪が検出されている。豊中市教育委員会の御教示による。
- 3) 福井英治編「田能遺跡発掘調査報告書」(尼崎市文化財調査報告書第15集 尼崎市教育委員会、1982年)。
- 4) プロポーションの点でいうと、むしろ田能遺跡の後期Ⅰ期とされる第1B調査区出1:甕(同報告書第15図-15)にも類似するが「口縁叩き出し技法」は認められない。
- 5) 石野博信、村上祐揚、松下勝「播磨・吉備遺跡—古墳時代前期集団墓の調査」(『兵庫県埋蔵文化財調査集報』第2集 兵庫県教育委員会、1974年)。
- 井守徳男「本位田遺跡」(『中国縱貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査報告書』佐用編 兵庫県教育委員会、1976年)。

第3章 極限物質研究センター用地内の調査成果

1 試掘調査の概要

調査地は前章で述べたテニスコート地点から南東へ約100m離れた丘陵最高位部にあり、ここから北西および南方向へ尾根が伸びている。テニスコート地点に比べてさらに眺望の開ける当該地もまた、戰後米駐留軍による削平を経ており、本來の丘陵頂部にあたる部分が現状では広い平坦地となっている。1922年の陸地測量部の2万5千分の1の地形図を読み取ると、この丘陵頂部の標高は70mを越えており、現在の最高位部が約67mであるから、3m以上の削平を受けていることになる。

試掘調査では、センター建設とともに地形の改変が計画されている約5000m²のうち、Ⅲ地形の残存が予想される丘陵縁辺部を中心に18本のトレンチを設定し、上層断面の調査と遺物の有無の確認を行った(図24)。

その結果、第7、8、11、12、13トレンチでは、盛土下に旧地表、および堆積土が残存していることが確認された。また、第12トレンチでは旧地表下に炭化物を含む埋土をもつ浅い皿状ピットが断面で観察された。遺物は第1、7、12、13トレンチで出土し、その内容は石器、埴輪片、須恵器片、上師質土器小片などであった。このうち、第1トレンチのものはすべて盛土中からの出土である。

以上の状況からみて、当調査地内では南部の第12、13トレンチ付近と西部の第7、8トレンチ付近に辛うじて削平を免れた遺構、遺物が存在している可能性が高いと判断された。

2 発掘調査の所見

発掘区の設定 試掘調査における遺物出土トレンチを中心に三ヶ所の発掘区を設け、北から順にⅠ区、Ⅱ区、Ⅲ区とした(図12)。なお、Ⅰ区は既に地表面まで削平されているが、その上に遺物を含む土砂が盛られているので、盛土中の遺物採集を目的として発掘区を設定した。

土層の構成(図23) 調査地内の層序はⅡ区、Ⅲ区ともほぼ同様である。まず、現在の地表下には米軍による造成時の盛土が存在する。Ⅰ区では盛土中にかなりの量の遺物が含まれており、他区でも量は多くないが遺物が出土する。盛土下にはⅢ地表面が存在しているはずであるが明瞭ではなく、テニスコート地点のような腐植土が黒い帯をなして認められる状況はなかった。

盛土下は淡黄色砂質土(②層)、黄色粘性砂質土(③層)、黄褐色粘性砂質土(④層)の三層を経て橙褐色粘土の地山に至る。各層とも遺物包含層であるが、Ⅱ区において④層から多量の円筒埴輪が出土したのを除いては、全体的に遺物量は少ない。④層は古墳時代の遺物のみを含む

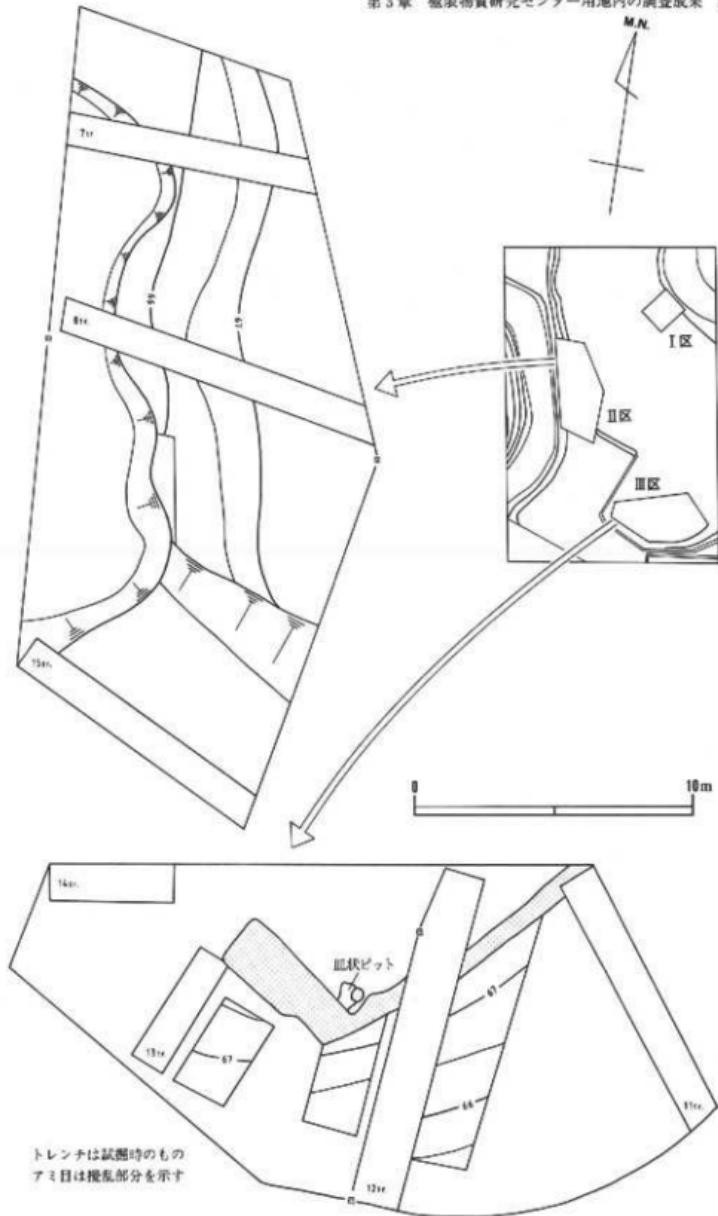


図12 極限物質センター地点発掘区平面図

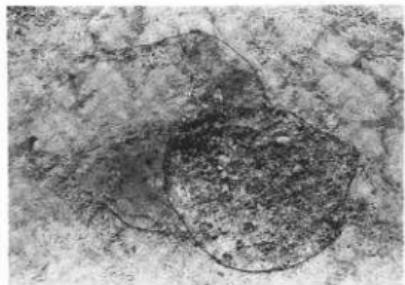


図13 III区皿状ピット

に対して、②、③層にはこれに加えて奈良時代以降と思われる須恵質土器片などが認められる。なお、III区では黄色粘性砂質土(③層)をベースとする皿状ピットが検出されている。

I区の調査 既に述べたように当区では地山面まで削平されているが、盛土中から埴輪片、須恵器片を採集した。量的にはまとまっているが、殆どが細片となっており、造成時の破壊の跡を物語っている。

II区の調査 丘陵頂部から西側へ下る斜面部にある。地山直上の黄褐色粘性砂質土からは、地山に張りつく形で円筒埴輪片がかなり出土しており、古墳築造後の早い時期に流出した埴丘盛土の再堆積と考えられる。こうした状況からみて、ごく近いところにこれらの遺物を有した古墳の存在が推測されるが、発掘区内からは関連する遺構は検出されなかった。おそらく古墳は、既に削られてしまった丘陵高位部に存在していたと思われる。

III区の調査 現状では丘陵頂部平坦部の一部となっているが、発掘したところ、旧地形は南東方向にやや急に下っていく斜面であることが判明した。発掘区北半部は削平されたうえ、建物基礎や廐棄物を投棄した穴などによる擾乱が及んでいるなど、相当の改変を被っていた。

遺構としては、中央部で黄色粘性砂質土をベースとした径60cm程の不整円形で皿状にくぼむピットが検出された(図13)。上部は既に削平されており、10cmの深さしかなかった。中から遺物は出土せず、所属時期は明確でないが、ベース層中に奈良時代以降と思われる須恵質土器片が認められること、当区の盛土中から12世紀前後の瓦器片が出土していることなどから、これらに近い時期の遺構である可能性が考えられる。なお、同一層位にある別のピットが、試掘時に、第12トレンチ東壁断面にわずかにかかる確認されており、この面上で人間活動が展開されたことは相違ないが、その痕跡の多くは残念ながら削平によって消え去っている。

3 出 土 遺 物

円筒埴輪、須恵器、瓦器、石鐵等が認められる。多くがI区盛土とII区地山直上層から出土した。原則的に言えば、I区盛土中の遺物はこれがどこの土であるか判明しないかぎり他と同列に扱うことは出来ない。しかし、当地点では丘陵頂部を削った土砂を周間に押しやって平坦面を確保するという造成がなされており、離れた地点から盛土が運ばれたわけではない。また、I区盛土中から出土する円筒埴輪とII区地山直上層中の円筒埴輪は胎土、調整技法などの点で類似点が多い。したがって、ここでは両者の円筒埴輪がもとは同一古墳のものであったという認識に立ち、特に記述上の区別は行わない。

円筒埴輪(図14、図版14~16) 口持埴輪には普通円筒と矧頬形円筒がある。いずれも黄褐色あるいは橙褐色を呈す薄手のもので墨斑は認められない。前章でB類と呼んだ二次調整のヨコハケを少くものが殆どであるが、1例だけ部分的にヨコハケを施している。しかし、これもそれ以外の点では他の個体となんら差異はない。

形態についてはすべて破片からの復元であるが、それによると、底部径15~20cm、口縁部径25~30cm程度の、上に広がる器形となる。図14-6のように円形の透孔が2段連続して施されているもののが存在することから、口縁部、透孔のある2段、基底部の合わせて4段からなる、器高40cm程度の円筒埴輪を推定できる。タガは太さ1~1.5cm、器壁からの突出度5~6mmの貧弱なものである。タガ先端部分のナデが弱いものや先端部を全くナデないものが多く、そのため、断面形が頂点の鈍い三角形または端面が丸みを持った台形になるのが特徴である(図版16、1-d)。タガと器壁の接合はタガ上端面と下端面の粘土を、円筒器壁にナデつけることによって果たしているが、下端面のナデつけはしばしば粗雑であり、ためにそのつなぎ目が消えていないことが多い。外面調整はナナメハケによる一次調整のみであり、内面はナデ、口縁部付近内

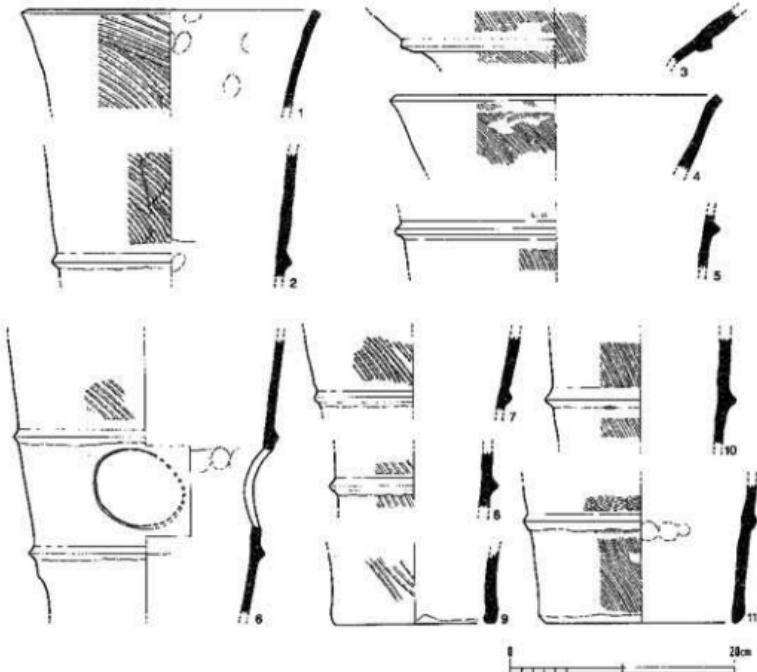


図14 円筒埴輪実測図

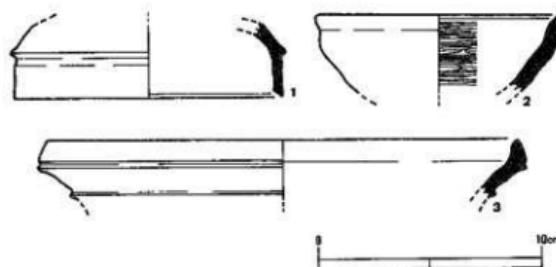


図15 須恵器・瓦器実測図

間に一部ハケが認められる。2は外面にヘラ描きの線刻がある。

ところで、当地点の円筒埴輪外面のハケメを観察すると、原体として全く異なる二者が認められる。ひとつは条線密度が5~6本/cmの、

通常この時期の埴輪によく見られるタイプ(図版16, 1-a)であり、もうひとつは条線密度1~2本/cmの特異なものである(1-b)。後者は条線の凸部と凹部の幅が同じくらいでかつ太い。一見タタキメのようであるが、条痕がややカーブしていることから、やはり原体を器壁上で動かしていると解される。原体としては年輪幅の広い板材の小口を斜めに切ったもの、あるいは板の小口部分に幅の広い凹凸を人工的に刻んだものなどが考えられる。なお、原体の違いは埴輪の色刷の違いと相關があり、通常のハケメのものが棕褐色個体、タタキメ様のものが黄褐色個体にそれぞれ対応する。

須恵器(図15-1, 3) 小片が多く、図示できるものは僅かである。1は杯蓋で、復元口径11.3cm、口縁端面は明瞭な段をなし、端面はややくぼむ。天井部と体部を画する稜は断面三角形のやや鈍いものである。3は甕の口縁部である。復元口径20cmほどの小型品。口縁端面の下部に1本の沈線を施し、頭部外面には破断面の近くにからうじて1本の突線が認められる。同一個体と思われる体部には平行タタキメの上に部分的にカキメがみられる。須恵器としてはこのほかにIII区から埴輪を伴わない出土したものが少量ある。細片のため図示できないが、粗大な格子目ふうのタタキメを施すものがある。奈良時代以降の所産であろう。

瓦器(図15-2) III区表土層から出土した瓦器小片である。復元径約10cmであるが、小片からの復元のため確実ではない。体部は丸みを持ち、口縁部外面は強くナデられる。外面は無文、内面にはやや隙間のあく太いヘラ磨きが施され、口縁近くに沈線がめぐる。器壁はかなり厚い。

12世紀前後のものであろう。

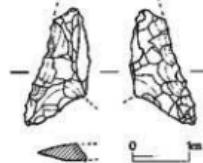


図16 石鐵実測図

打製石鐵(図16、図版13) II区淡黄色砂質土より出土した凹基無基式の打製石鐵である。半分以上を欠損し、現存長2.1cm、厚さ3.2cm、重量0.4gを計る。側縁はわずかに内湾し、基部の抉りは比較的深い。A、B両面とも全面に調整剝離を施し、大剝離面を残さない。調整剝離は主としてフリー・フレイキングによるが、A面基部とB面側縁の各一部にステップ・フレイキングが認められる。小型で基

部の抉りが深い凹基無基式石鏡は、畿内では縄文時代に一般的であるが、弥生時代中期以降にも残存するものがあり、形態から時期を確定することは出来ない。石材は肉眼観察によればサスカイトである。

4 小 結

当地点でもまた古墳の存在を確認した。残念ながらテニスコート地点と同様に戦後の削平によってその本体部分は消滅していたが、調査によっていくつかの重要な点を明らかにすることことができた。

古墳は地形的な条件や遺物の存在状況などからみて、径十数m程度の小規模墳と考えられる。出土した円筒埴輪は殆どすべてが本群でB類と呼んだもので、低く不整形のタガを有し、外面二次調整のヨコハケを省略している。こうした特徴を持つ円筒埴輪は川西宏幸氏の分類による第V群のものに相当する。⁽¹⁾ また、共伴した須恵器はTK47型式期に比定され、当地域における第V群埴輪の存続期間の一点を示す資料とすることができる。当地方のこの時期の円筒埴輪については、資料数も少なく不明瞭な点が多かったが、今回その空白を埋める資料が共伴の須恵器とともに明らかになったことは大きな収穫である。

ところで、近年の円筒埴輪研究には川西氏が労作「円筒埴輪総論」において提示した編年的枠組みを基礎としてこれを地域的に再検討するものや、枠組み内の細分をさせざるといった方向性が見られる。ここでは第V群埴輪出現前後の問題点について若干の整理を加えてみよう。

今回の待兼山遺跡の調査では前述のテニスコート地点も含めて二基の古墳の円筒埴輪が明らかとなつたが、一方はヨコハケを施すもので川西氏のいう第IV群、他方は第V群のものにあたる。共伴須恵器は小片であるがそれぞれTK208型式期前後、TK47型式期に属することから、当地域でもこの間に第IV群から第V群への変化なし転換がなされたことがわかる。

さて、いま当遺跡の両群の円筒埴輪を比較してみた場合、その間に須恵器一型式分などの時間の流れを考慮したとしても、型式序列の1本の線上に並べることがためらわれる程の差異がある。たとえば、第IV群のタガは台形ではあるが、確実に「下ごしらえ」したものを貼り付けているのに対し、第V群のものは不整形の粘土紐を貼り付けた後に器壁上で難なヨコナナデによって形を整えようとしたもので、その格差は大きい。⁽²⁾ 少ない資料から推し量る危険をあえて犯せば、当地域の第V群埴輪はそれまでの埴輪製作者が製作技法を徐々に変化させることによって出現したというよりも、まず別の地域で成立したもののがそのまま持ち込まれた可能性もあるといえよう。⁽³⁾

ここで問題となるのは、第V群円筒埴輪が各地域にどのような在り方をもって出現していくかという点である。具体的に言えば、先行する円筒埴輪群からの型式変遷の序列をふんで漸移的に変化した結果としてなのか、それとも型式的にヒアタスのあるものが突然現れてくるのか

ということである。さらに後者のばあいは第V群埴輪がそれ以前のものと共存しつつ比率を増しながら最終的にとてかわるのか、あるいはある時期に第V群埴輪のみを樹立する古墳が一斉に出現するのかという問題も含んでいる。これらは今後の資料の増加を待って各地域ごとに慎重に検討していく必要があると考えられる。

当地点の古墳は5世紀末～6世紀初頭にかけての築造で、テニスコート地点の古墳よりやや後のものであるが、同一丘陵尾根上に立地している点からみて、同一集団の世代の違う有力者の埴輪と考えられる。古墳時代中期の小家族層の動向を示す古墳群の実態は、西摂地域ではこれまで殆ど明らかになっておらず、そうした意味でも今回の調査成果は重要である。前章の結語でも述べたように、ごく近年になって、豊中市域の平野部で中期の小規模古墳が確認されるようになってきた。この待兼山丘陵にも更にいくつかの古墳が存在することが予想されており、これらを含めて今後の研究が期待される。

このほか今回の調査では平安時代の瓦器なども出土し、この時期と考えられる遺構も一部確認されるなどいよいよ様々な時代の複合遺跡としての様相が濃厚になってきたといえよう。

(注)

- 1) 川西宏幸「円筒埴輪統論」(考古学雑誌64巻2号、1978年)。
- 2) 田上雅則「桜塚古墳群の円筒埴輪」(柳本照男編『攝津豊中人跡占墳』豊中市文化財調査報告第20集 豊中市教育委員会、1987年 p.159)。
- 3) 第IV群までの円筒埴輪のタガはその突出度の高さ、焼った断面形からみて、あらかじめ断面方形に下ごしらえした粘土紐を使用したものと考えられる。下ごしらえの方法としては手打ちうどんを作るときのように、広く延ばした粘土板を何本もの粘土紐に切り裂いていくやり方などが想像される。これに対して第V群のタガは一般に不整形で歪んだものが多く、不整形の粘土紐を巻き付けた後、回転などをを利用して形を作りだそうとした結果と解される。
- 4) このへんの状況を解明する手掛かりの一つとしては、豊中市利倉南遺跡の資料があげられる。服部聰志氏の御教示によれば、同遺跡ではTK23型式前後の須恵器を出土する周溝をもつ古墳が検出されている。墳丘は削平されていたが、その削平された面上において第IV群と第V群の円筒埴輪片が群集して出土した。ただ、出土埴輪のすべてがこの古墳に伴うかどうかについては、なお検討中ということである。1987年調査。

第4章 大阪大学構内の埋蔵文化財

豊中キャンパスを含む待兼山丘陵一帯には各所に様々な時代の遺跡、遺物が存在しており、猪名川下流域を見下ろすこの丘陵上が、数千年の長きにわたって人々の活動の舞台となっていたことを物語っている。

豊中キャンパス内の埋蔵文化財については、すでに『待兼山遺跡』(1984年刊)においてその概要が述べられている。ここでは、それ以降に文学部国史研究室員によってなされた踏査や測量調査によって明らかになった事実を中心に述べてみよう。

医療技術短大内の遺跡 大阪大学医療技術短期大学部(以下医短と略す)は、標高77.3mの待兼山を最高所とする丘陵の西および南斜面を敷地としている。この敷地内に2、3の墳丘状のたかまりが存在することはすでに認められていたが、そのうち1箇所について測量調査を実施した(図18、A地点)。当地は待兼山頂上から北西に伸びる尾根の先端部分にあたり、現在はここに大きな石碑が二つ並んで立っている。南東から下ってきた尾根が先端部分にいたって再び盛り上がる地形は、自然地形とするには疑問が残る。図17によると、この部分はやや改變を受けているものの、径20m程度の少しいびつな円丘状のたかまりとしてとらえることができる。この

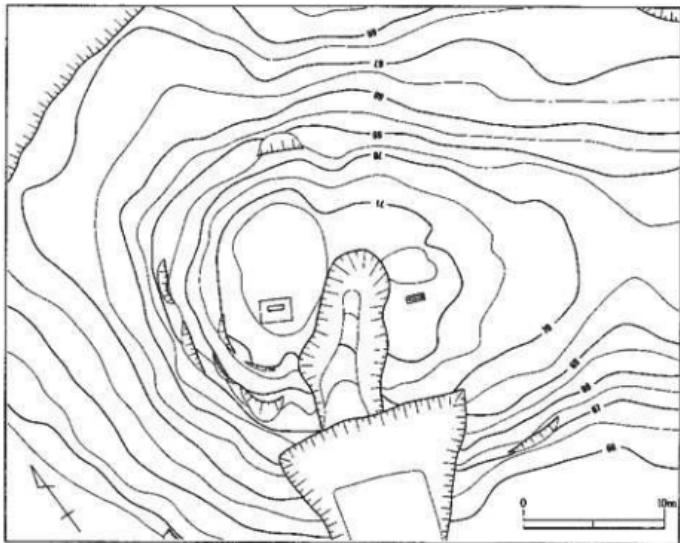


図17 医短構内古墳地形測量図

裾部分で須恵器片が3点採集されており、うち1点を図示した(図19-3)。器台の口縁部と考えられ、比較的整った波状文からみて5世紀末~6世紀前半頃のものであろう。平野を見下ろす尾根先端部という立地条件を合わせ考えると、このたかまりが同時期の古墳である可能性がきわめて高い。

図19-5は、待兼山頂上からやや西に下った地点(図18, B地点)で採集された須恵器片である。外面には平行叩き目を有し、内面は丁寧にナデている。形態の特徴からみて横瓶の肩部と考えられる。6世紀前半のものであろう。採集地点が上述の器台片と100m以上隔たっており、別の古墳が付近に存在すると考えられる。

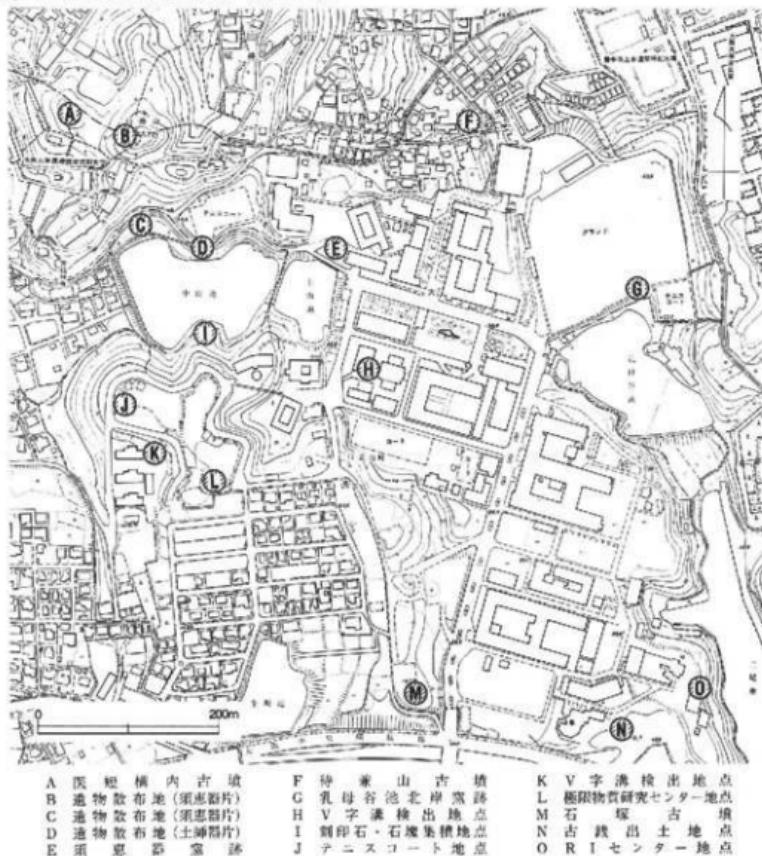


図18 農中キャンパス内遺跡分布図(1988年3月現在)

医短敷地内は大きな建造物が少ないこともあって、豊中キャンパスのなかでも比較的旧地形がよく残っている部分であり、次に述べる中山池北岸の遺物散布状況からみても、さらに敷地内には古墳や窯跡などの存在が推定される。

中山池北岸 ここではこれまでに須恵器片や土師器片が十数点採集されている(図18, C地点)。図19-4には土師器高杯を示した。残存状況も悪く細かい時期は限定できないが、付近で採集される須恵器片が概ね6世紀代に属すると判断されることから、それらと関連のある遺物と考える。当地点に散布している遺物は、地形的にみて、北側の医短構内にかけての丘陵斜面から流れ込んだ可能性が高いが、同時に池の水面下に遺構が存在している可能性を考慮しておく必要もある。

理学部周辺 理学部西側のいわゆる「大高の森」付近に石塚古墳という前方後円墳が存在していたことは、既に前回の報告書に述べられているが⁽¹⁾、今回豊中市教育委員会の御厚意により、ここで採集された円筒埴輪を図19-1, 2に掲載した。底部の破片で2は復元径21cm、器壁が厚いことを特徴とする。1はこれよりやや小ぶりで、薄い。いずれも器向の風化が著しく、2の底部付近内面に指頭痕が見られるほかは調整等は不明であるが、どっしりとして比較的整った底部は、これらが中期古墳の円筒埴輪である可能性をうかがわせる。現在は明瞭な墳丘状の地形は認められないが、当地点は植栽などのためにかなりの盛土が施されているもようで、古墳が埋没して残存していることも十分考えられる。

このほか、理学部南東の空き地のなかには土壇状の高まりが認められ(図18, N地点)、ここからは江戸時代の古錢がしばしば採集されるという。

何度も述べてきたように、豊中キャンバス内は、初期の造成時に広い部分で激しい削平を被っている。しかしながら、ここ数年の建設工事に伴う試掘調査、立会調査などによると、いくつかの地点で旧地形が良好に残存しており、近辺に遺構が存在することを示唆する有機質を含んだ

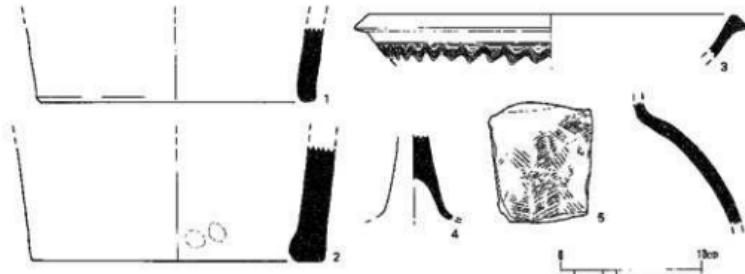


図19 豊中キャンバス内出土遺物実測図

土層堆積などが認められている。また、本来は低い部分であった谷部などでは、深い盛土の下に遺構や遺物が残存していると予想され、建物基礎が深く打設される場合などは、埋蔵文化財に対する慎重な対応が必要であろう。

(注)

- 1) 大阪大学待兼山遺跡発掘調査団編『待兼山遺跡』大阪大学、1984年 p.1。
- 2) 豊中市教育委員会保管
- 3) 大阪大学理学部村崎房子氏の御教示による。氏より出土銭の一部の提供を受けた。寛永通宝のかのいわゆる新寛永と呼ばれるもので、上限は寛文8年(1668年)とされる。青山礼志編『新訂貨幣手帳』ボナンザ社、1982年 p.135。

第5章 巖内における鞆形埴輪の変遷 ——埴輪に描かれた鐵と實物の鐵——

1 はじめに

今回の待兼山遺跡の調査で出土した鞆形埴輪はいずれも断片であり、全体の形を推しはかることは困難であるが、幸いにも鐵および肩かけ紐と思われる部分の破片が含まれており、ある程度の特徴を把握することができる。本論では、まず第1節で、巖内出土の鞆形埴輪の時期的変遷を概観し、第2節では鞆形埴輪に描かれた鐵と實物の鐵との形態を時期ごとに比較することによって鞆形埴輪の表現法の特質の一端に迫りたい。さらに第3節では、当遺跡出土の資料が、巖内の鞆形埴輪のなかでいかなる位置を占めるのかを検討し、合わせて線刻技法の観察などを通じて、当例の個体的特徴を考察したい。

2 鞆形埴輪の編年的考察

鞆形埴輪の編年的考察は、他の形象埴輪と同様、從来あまり試みられたことがなかったが、近年、勝部明生氏がその大局的な見通しを示した。⁽¹⁾ 勝部氏によれば、古墳時代前期後半から中期中葉にかけての鞆形埴輪は實物の鞆を正確に写実したものであるが、それ以降は小型化と施文の簡略化がみられ、後期に入ると矢筒や鐵の表現さえ欠落した形態、すなわち從來石見型埴形埴輪と称されてきたものに変化するという。そしてそのことは、古墳祭祀の変化による器材埴輪の形態化を示すものだとする。また、川村紀子氏は、古市古墳群内の埴輪を詳細に検討した結果、鞆形埴輪については時期が下るにつれて小型化と文様の簡略化が認められることを指摘している。⁽²⁾ 岡氏の見解は、從来から形象埴輪一般について指摘されていた、写実的なものから簡略化したものへという大きなプロセスを、鞆形埴輪を材料に具体化したという点で傾聴に値する。ただし、岡氏の論考は、鞆形埴輪自体の細分編年を確立を直接意図したものではなかった。ことに勝部氏は、巖内において鞆形埴輪が盛行する前期後葉から中期にかけての細分編年を、資料的な不充分さを理由に、意識的に差し控えている。しかし、視点をより細かくして、鐵部及びその周辺部の表現方法に限って検討してみると、かなりの多様性がみられ、なお細分できる可能性がある。

さて、初現期に近いと考えられる鞆形埴輪の資料のうち、鐵部周辺の形態を知りうるものとしては、奈良県御所市宮山古墳⁽³⁾および京都府宇治市庵寺山古墳⁽⁴⁾の例がある。宮山古墳には數個体の資料があるが、最も残りのよい1号鞆形埴輪(図20-1)は、矢を容れる断面長方形の筒部と、その背後につく板状の背負革をかたどった部分から成る。直弧文を刻んだ筒部の上端部の上面と側面に、鐵を浮き彫り状に表現する。筒部の両側、鐵の下端部あたりから浮き彫り状に

転形埴輪の編年的考察

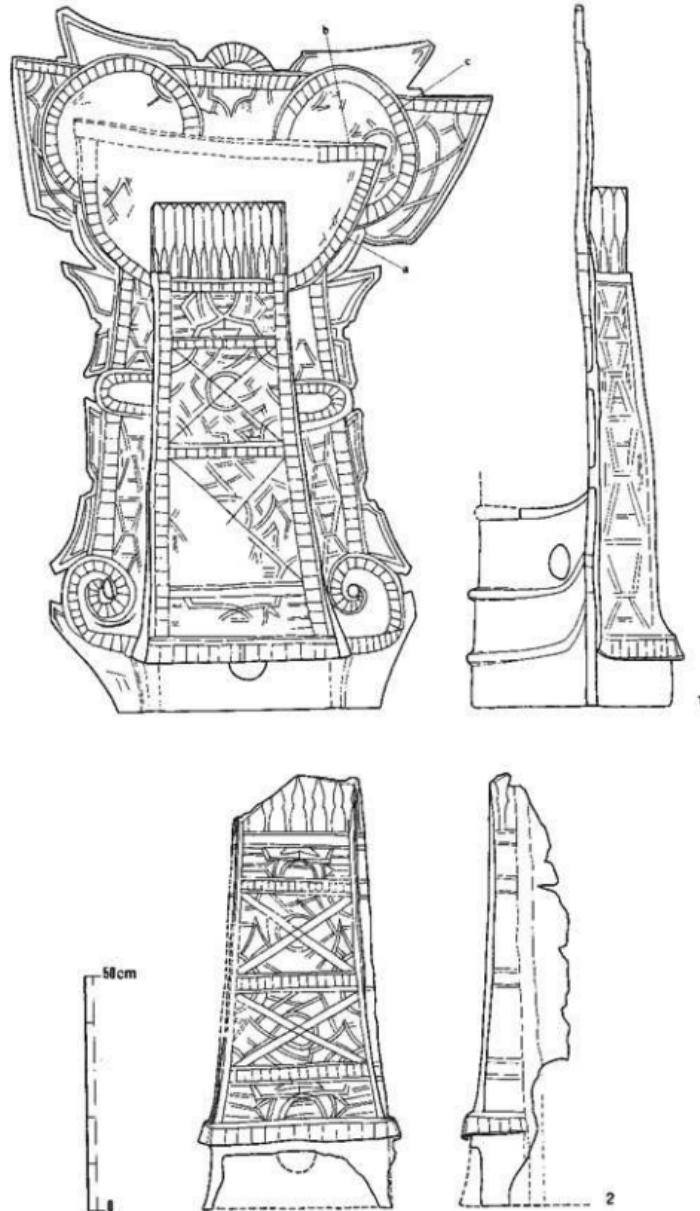


図20 墓内出土の転形埴輪1) 1宮山、2茶山1分 注4), 5文献より再トレース

刻んだ梯子状の弧線(図中a)が斜め上方に立ち上がる。この弧線は勝部氏の指摘通り、筒と板状の背負革(以下、「背負板」と称す)とを固着するための皮紐を表現したものであろう。この梯子状弧線の上端は、左右それぞれ、直線的に横走する梯子状の線の両端につながるものとみられる。さらに、その部分を開むように取りつく円弧cは、肩かけ紐の表現であると考えられるので、この梯子状の横線は背負板の上辺を表わしたものと推測される。なお、筒部の中央部と下端部のそれぞれ両側にも、筒と背負板を結びつける皮紐の表現が認められる。宮山古墳2号輪形埴輪は、背負板の上半部を欠失するが、下半部および筒の表現は、1号とはほぼ同様である。

次に庵寺山古墳の例をみると、これも宮山古墳の例と同様、断面長方形の筒部とその背後につく背負板の部分から構成されており、鎌は筒部の上面に半ば浮き彫り状に描かれる。背負板の上半部は欠損しており形状は不明であるが、下端部には宮山例と同じく皮紐の表現がみられる。ただし、宮山例の皮紐が梯子状のモチーフを利用して表現されているのに対し、この例では単純な二重の円弧として描かれており、間を埋める短線群は認められない。

中期前葉に属する例は現状では明らかでないが、中葉の例としては大阪府羽曳野市墓山古墳の資料がある。⁽¹⁷⁾これも直弧文を刻んだ筒部の上面に鎌を描くという点では宮山・庵寺山兩例と同様であるが、鎌の表現法が浮き彫り状ではなく、線刻によっている点が異なる。背負板については不明である。この墓山古墳の陪塚と考えられている同市野中古墳の例(図21-8)は、以上にみてきた諸例とは大きく異なる要素を持つ。すなわち、以上の諸例がいずれも筒部の上面に鎌を描いているのに対して、野中例では、背負板と同一平面上に鎌を描く。鎌は線刻で表現する。筒部は欠失しており不明であるが、筒と背負板を結ぶ皮紐(図中a)および肩かけ紐cの表現は宮山例とはほぼ同一である。ただし、梯子状のモチーフは浮き彫り状ではなく線刻であり、背負板の上辺を表わす横線bと皮紐aの接点の表現は、宮山例に比べて省略がみられる。また、宮山例において肩かけ紐の周間に刻まれる直弧文は、この例では著しく退化している。ほぼ同時期とされている大阪市長原遺跡の例でも、背負板と同一平面上に、鎌を線刻で表現している。

中期後葉の資料としては、大阪府茨原町黒姫山古墳、同堺市筋橋遺跡などの例がある。黒姫山古墳の例(図21-1)は、鎌を背負板と同一平面上に線刻で表わす点では野中・長原両例と同様であるが、周開の表現法に差異が認められる。すなわち、野中例では梯子状のモチーフによつて表わされた皮紐と背負板上辺が鎌部を取り囲み、その両肩に同じモチーフの肩かけ紐が取りつくのに対し、黒姫山例では、鎌部を単純な二重線で矩形に囲む(図中a)。この二重の矩線は筒と背負板を結びつける皮紐の表現としては不自然であり、むしろ筒の裏板の縁取りの表現と考えた方が理解しやすい。そのように考えると、肩かけ紐や筒と背負板を結ぶ皮紐の表現として候補に上るのは、鎌部の左側から立ち上がる蕨子状の重弧線bおよび矩線の角から斜め上方に伸びる二重の直線cである。前者bは完結せず、背負板に穿たれた円孔につながってい

ることから、肩かけ紐と考えるよりも、筈と背負板を結ぶ皮紐とみなす方が妥当であろう。その形状が宮山例における筈部下端両側の皮紐の表現と共通することも、この推測を支持するに足る。後者には、黒姫山例と同じく鐵部を二重の矩線で囲む翁橋遺跡の例(図21-6)および大阪府藤井寺市国府遺跡出土例(図21-5)にも認められる。この斜め上方に伸びる二重線が何を表現しているのかは不明であるが、筈の裏板の上辺の角と考えられる位置に取りついていることから、やはり筈と背負板を結ぶ何らかの付属物を表わしている可能性が高い。いずれにせよ黒姫山、翁橋、國府の3例における鐵部周辺の表現形態は基本的に同一であり、野中例とは趣を異にしている。このタイプの鞍形埴輪における肩かけ紐の表現は、断片的な資料が多いために明確でないが、最も残りのよい黒姫山例に限っていえば、欠落している可能性がある。

次に、細かい時期の確定はできないが、良好な資料と思われる例について検討しておきたい。まず大阪府羽曳野市茶山1号墳の3例がある。伴出した円筒埴輪は前期中葉から後期までの時期幅を持つと報告されている。このうち筈部のみ遺存する個体(図20-2)は、筈部の上面と側面に線刻で鐵を描く。筈部の直弧文は宮山例に比べて若干の退化がみられるが大きな崩れはなく、宮山例よりも後出であるが時期的に著しい隔たりはないと考えて大過なかろう。前面に大きな黒斑を有する点もこの推測を支持する。また、筈部上端と背負板を残す個体(図21-4)は、上の例と異なり背負板と同一平面上に線刻で鐵を表現する。鐵部を鉤形に囲む線がみられるのは黒姫山例などと共通する点であるが、これに梯子状のモチーフを用いる点と、矩形の上辺中央部から梯子状の刻線が垂直に立ち上がる点は黒姫山例などと異なる。この立ち上がりの延長上にはおそらく長方形のくりこみがあり、筈と背負板を結びつける何かを表現している可能性がある。鉤形の角に肩かけ紐を表現する円弧は取りついていない。比較的多くの部分が遺存するにもかかわらず黒斑が認められないということから、中期中葉に上限を置くことができよう。さらに、上半部を残す個体(図21-2)は、鐵の表現を欠く点で特異である。しかし、本米鐵が描かれるべき空白は、背負板と同一平面上にある。鐵部の周囲の表現は野中例とほぼ同様である。当例も黒斑を持たず、上限は中期中葉に置かれよう。次に京都大学蔵の大坂府羽曳野市井田白鳥遺跡の例(図21-7)をみると、これも背負板と同一平面上に鐵が線刻で描かれる。鐵部を黒姫山例と同じ単純な二重の矩線で囲むが、その両角に梯子状モチーフによる円弧を取りつけ、肩かけ紐を表現する点では野中例と共通する。最後に、奈良県高取町市尾今田2号墳の例は、筈部上面に鐵を線刻で描く。中期の中葉に属するか後葉まで下るか、確固たる判断がつかない。

以上のことから、まず鞍形埴輪は鐵を表現する位置によって大きく二つに分類できる。その一は、筈部の上面に鐵を描くものである。これをI式とする。I式の実例としては宮山古墳(図20-1)、庵寺山古墳、墓山古墳、茶山1号墳(図20-2)、および今田2号墳の資料がある。宮山例を最も古く、墓山例を最も新しいものと考えると、I式はおおむね前期末頃か

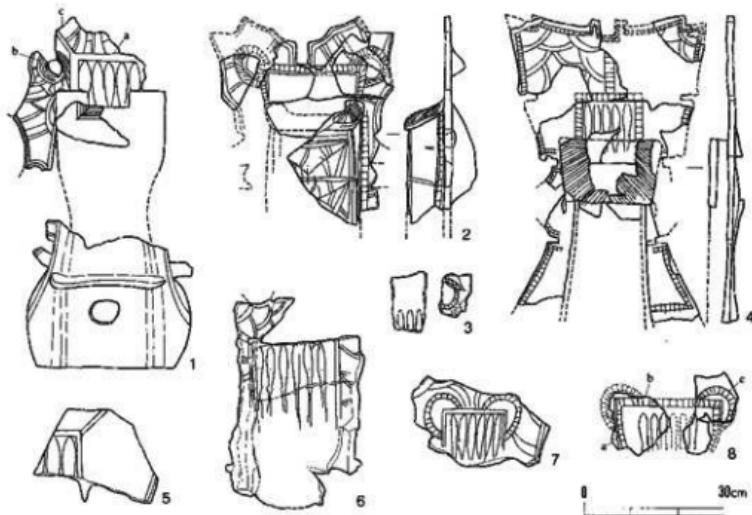


図21 磐内出土の輪形埴輪(2)
1黒姫山、2・4茶山1号、3待兼山、5伊附、6翁機、7賀田白鳥、8野中
注(7)、(8)、(10)、(11)、(13)文献より再トレース 5、7は写真トレースのため誤差あり

ら中期中葉頃の時期におこなわれた型式とみなすことができる。I式は大型で、精緻な波弧文で飾られるのが普通である。この型式のうちには、宮山、庵寺山両例のように多数の鉢を浮き彫り状に表現するものと、墓山、茶山両例のように5～7本の鉢を線刻で表現するものがあり、各例の所属時期からみて前者の方が古い様相をとどめるものと考えられる。⁽¹⁷⁾

その二は、鉢を背負板と同一平面上に描くものである。これをII式としたい。II式のうち最も時期がさかのばると考えられるのは、中期中葉に属する野中古墳の例である。II式の輪形埴輪は、磐内においては明確に後期に下る例が現状では認められず、所属例の多い中期後葉における盛行の後は急速に衰退すると考えられる。この型式に属する例は、いずれも概して小ぶりで、5～6本の鉢を線刻で表現している。刻まれた直弧文は退化が著しく、単に弧線を鱗状に重ねている例がしばしばみうけられる。II式をさらに細分すると、鉢部を半円形に囲む刻線の両角に円弧状の肩かけ紐を描き、梯子状のモチーフを多用する野中タイプと、鉢部を二重の刻線で矩形に囲み、その角から斜め上方に二重の直線が伸びる黒姫山タイプとの存在を指摘することができる。この両者の先後関係は現状では押えることができず、むしろ系譜を異にするものである可能性が強い。そのように考えると、野中タイプの中では最も時期的にさかのばるとみられる野中古墳の例において、鉢の周囲の表現法が宮山例に類似することから、このタイプの系譜的祖型をI式の宮山例を代表とするものに求めうる可能性が高い。黒姫山タイプの祖型

となりうる例は、現状では指摘することができないが、かたどったものとの類の型式が野中例のそれと異なっていたことも考えておかなければならない。

なお、野中・黒姫山両タイプの中間的な特徴を有するものもある。菅田白鳥例は、先にも述べたように、鐵部を囲む矩形は黒姫山例と共通するが、肩かけ紐の表現は野中例と類似する。鐵部を囲む矩形は筒の裏板の縫取りの表現とするにふさわしいが、そうだとすると筒に直接肩かけ紐がついていることになる。さらに、その周囲の弧文を刻んだ部分が背負板に当たるとすれば、実物の鐵の形態から考えて矛盾に満ちた表現といえる。また、茶山1号墳の例のうち図21-4の個体は、梯子状のモチーフを用いる点では野中例と共にし、鐵部を囲む刻線が矩形をなす点は黒姫山例と類似するが、矩形の上辺中央から垂直に立ち上がる刻線は他に類例をみない。さらに背負板の外形が他の例と異なり石見型盾形埴輪の外形と酷似するという点も独自的である。したがって当例は、これまでみてきたものとはまた別の系譜に属する可能性もある。畿内の鞍形埴輪が後期に入ると石見型盾形埴輪に受け継がれるという勝部氏の見解に従えば、当例は後期への傾斜を示すものとして興味深い。

本節で考察した畿内の鞍形埴輪の変遷と系譜の問題については、資料の増加を待ってなお補足、修正すべき点が多々あろう。しかし、少なくともI式からII式へという大づかみな変化を指摘することは、現状でもある程度許されるであろう。

3 鞍形埴輪に表現された鐵の形態

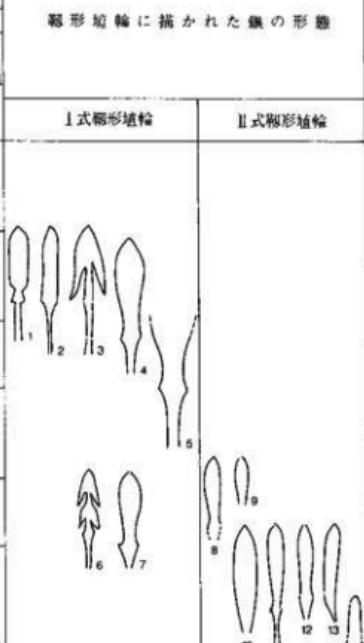
本節では、視点をより細かくして、鞍形埴輪に表現された鐵の形態を実物の鐵と時期ごとに比較することによってその特質を把握したい。その概要を表1に示した。

まず、I式でも古柏を呈すると考えた宮山古墳の諸例には、3種類の鐵の表現がみられる。その第一(表1右半部-2)は、最も残りのよい1号鞍形埴輪に描かれた柳葉式の鐵で、両側縁がほぼ直線的に平行し、比較的明瞭な関部を有する。この型式の鐵(表1左半部-I B a, 図22-1, 2)は、都出比呂忠志による前期占墳4分期案のうちIII期に属するとされる静岡県磐川市松林山古墳⁽²¹⁾、同清水市三池平古墳⁽²²⁾および畿内では奈良県桜井市メスリ山古墳⁽²³⁾の鐵製矢の鐵部などにみられる。きわめて大型で後を持たないのが普通である。III期には普通的な型式と考えられるが、次のIV期から中期にかけては主流でなくなり、後期には、畿内ではきわめて稀になる。第二(表1右半部-4)は、同じ柳葉式であるが、最大幅部位が先端寄りにあり、側縁は緩いS字状を呈し、わずかに突出する関部を経て緩やかに革部へ続く。この型式の鐵(表1左半部-I B b, 図22-3, 4)は、しばしば鳥舌形と称されるもので、鐵身下半部の断面形が偏平な長方形を呈する場合が多い。IV期の大坂府和泉市金黄塚古墳の東櫛の例を⁽²⁴⁾ほぼ初境とし、中期前葉から中葉にかけて普通にみられるが、中葉のうちでもより新しい、いわゆる長頭式鐵(II B)が定着はじめると段階になると衰退し、後葉になると畿内ではほとんど例をみない。第

表1 鉄形埴輪に描かれた鎌と実物の鎌の時期的対応関係

時期	古墳名	I 断面方形の頭部を有さない		II 断面方形の頭部を有する		鉄形埴輪に描かれた鎌の形態	
		A 無棱		B 矩頭			
		有棱	a b	a b c	a b		
前後	南原	○					
	三池平	○	○	○			
	松林山	○	○				
	メスリ山(鉄製矢)	○					
中期	和泉黄金塚東櫛 長良龍門寺		○	○			
	金津大塚山南櫛	○		○			
	同 北櫛	○		○			
前葉	豊中大塚第1主体 同 第2主体		○	○			
	體後龜山1号		○	○			
中期	山城恵解山 アリ山 七 観山 五条塙塚		○	○	○		
	新潟139号 野 中 新開1号		○	○	○		
後葉	百舌鳥76号 御獅子塚 カトンボ山		○		○		
	黒姫山 八尾寺1号				○		

1庵寺山、2~4宮山、5~12茶山1号、6墨山、7今田2号、8野中、9長原、10黒姫山、11若狭、13菅田白鳥、14侍寒山 鉄鎌分類 I A はいわゆる鋼鐵形鉄鎌で、定角式、翫頭式を含む。II B a は細根の長頭式鉄鎌で、片刃および短小な逆刺をもつものと含む。



III(表1右半部-3)は、短い頭部(翫頭)を有する腸抉式の鎌か、あるいは短い基部のついた、頭部をもたない腸抉式の鎌に矢柄を装着した状態を表現したものと考えられる。前者の型式の鉄鎌(表1左半部-II A b、図22-7~9)は、頭部の断面形が方形を呈するのが特徴である。その最も古い例の一つは、都出氏による前期II期に属する京都府向日市寺戸大塚古墳にみられ、III期の三池平古墳のもの(図22-8)もほぼ同様の形態を持つ。IV期以降は頭部の断面形が正方形に近づくとともに、頭部の伸長化、逆刺の発達が始まり、中期中葉頃からいわゆる平根型の長頭式鉄鎌として定形化していくと考えられる。後者の型式の鉄鎌(図22-10)は、弥生時代からたどれるが、畿内では前期末頃から中期中葉にかけて、とくに盛行をみる。さらに庵寺山古墳の例に表現された鎌(表1右半部-1)は、小さいスカート状の頭部をもつ短い柳葉式である。これは鋼鐵あるいは鋼鐵形鉄鎌にみられる形態(I A a)である。後者は畿内ではほぼ前期II期

までに限られるが、前者はIV期までは確實に残っている。

次に、I式のうち、鐵を線刻で表現するものについて見てみよう。まず、葛山古墳の例(表1右半部-6)は、二段の逆刺を有する馬鉄式である。この種の鉄鎌(表1左半部-II A c, 図22-5, 6)は、黄金塚古墳東郷の例をほぼ初現とし、中期中葉までみられる。また、茶山1号墳の例(表1右半部-5)は、先端部を欠くが、宮山例の第二の型式4と同様、鳥舌形の柳葉式鉄鎌(表1左半部-I B b, 図22-3, 4)の表現であることは確実である。今田2号墳の例(表1右半部-7)もまた同様である。

以上にみてきたI式の鞍形埴輪に表現された鐵の形態は、数種類にわたるが、いずれもI式の存続時期である前期後葉から中期中葉にかけての代表的な実物の鐵の形態と一致する。浮き彫り的表現から線刻表現へという変化はあるが、後者でさえその筆致は丁寧である。前節でみた鐵部の周囲の表現方法と同様、尖物の剣の模写という点で、まだ著しい崩れは認められない。

次にII式の鞍形埴輪の鐵の表現を見てみたい。II式のなかでは時期的にさかのばると考えられる野中古墳の例(表1右半部-8)は、関部を突出させるという特徴から、鳥舌形の柳葉式鉄鎌(表1左半部-I B b, 図22-3, 4)を表現したものと考えられる。しかし、両側縁を表わす二本の刺線が先端できちんとつながっていない箇所があったり、関部の突出の表現が不自然であるなど、同種の鐵を描くI式の茶山1号例(表1右半部-5)に比べて表現上の退化がみうけ

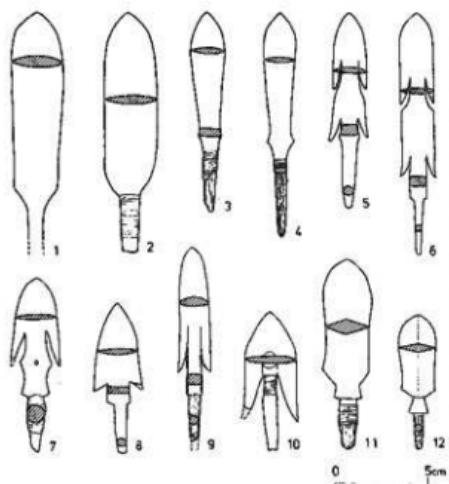


図22 鐵の諸型式

1メスリ山(鉄製矢), 2松林山, 3-10和泉黄金
塚東郷, 4-6五条塚塚, 7会津大塚(山南柏), 8三池
平, 9野中, 11桜井茶臼山, 12森尾(銅鏡)
注8, 10-12文献、その他参考文献より再トレス

られる。翁橋(表1右半部-11)、茶山1号(同12)の両例も同様の鉄鎌を表現するものであるが、野中例以上の退化、省略が認められる。黒姫山古墳の例(表1左半部-10)は、同じく柳葉式の鐵を表現するものであるが、側縁は典型的な鳥舌形のような緩いS字形にはならず、単純に外寄している。このような形態の柳葉式鉄鎌は弥生時代には一般的であるが、古墳時代にはごく初期を除いてはほとんど類例をみない。したがって、鳥舌形の柳葉式鉄鎌(表1左半部-I B b)もしくは宮山例に表現された側縁が直線的に平行する柳葉式鉄鎌(同I B a)の退化した表現とみなすのが妥当であろう。長原例の表現(表1右半部-9)も、小型ではあるがこれに近い。管

田白鳥例は、表現が著しく崩れ、柳葉式の鎌を描いたものであるということがわかる程度である。当例は前節で指摘したように、鎌部の周囲の表現にも矛盾がみられ、II式の鞍形埴輪のなかでも、とくに表現上の退化が進んだものと批える。

以上のように、II式の鞍形埴輪に表現された鎌の形態は、一種類ないし二種類に限定される。この種の柳葉式鉄鎌は、先にも述べたように、中期中葉でも長頭式鉄鎌が定着しはじめる段階になると次第に衰退し、後葉以降にはほとんど類例をみなくなる。したがって、II式の存続時期である中期中葉から後葉にかけては、すでに主流の地位を失っているか、ほぼ消滅している型式であるということができる。このような型式の鉄鎌が、II式の鞍形埴輪において最後まで表現され続けている点は重要である。黒姫山古墳の実物の鉄鎌がすべて長頭式であるにもかかわらず、そこに樹立された鞍形埴輪に柳葉式鉄鎌が描かれていることは、その端的な例である。さらに、II式の鞍形埴輪に線刻された鎌の筆致は一般に粗雑である。

I式、II式それぞれにおける鎌の表現形態を検討してきた。その結果、I式の鞍形埴輪は、同時期に現存した実物の鎌を浮き彫りまたは丁寧な線刻で表現しているが、II式の鞍形埴輪は、実際には衰退の途にあるかすでに消滅した型式の鎌のうち、限られた種類のものを線刻で表現しており、その手法は一般に退化、粗雑化が認められるという傾向がある。前節でみたI式からII式への変化は、鎌を描く位置を筋の上面から背負板の面へ移し、その本数も減らすという簡略化の過程と捉えうるが、本節での検討によって、それと同時に鎌の表現自体にも簡略化と写実的表現からの逸脱が進行することを、見て取ることができた。

4 待兼山遺跡の鞍形埴輪

縦年上、系譜上の位置 前節では、墓内出土の鞍形埴輪を対象に、主として鎌部周辺の表現方法に視座をすべてその変遷と系譜を考えた。本節では、まず、待兼山遺跡出土の鞍形埴輪(図21-3、図8)が、そのなかでいかなる位置を占めるのかを検討したい。

はじめに鎌部周辺の形態から、これがI式に属するものかII式に属するものかを考えたい。その際に最も問題となるのは、本報告書の第2章でも指摘したように、鎌部の上方に何らの区画線も見当たらないという点である。前節で検討したII式の諸例は、いずれも梯子状のモチーフか二重線で、鎌部を矩形または半円形に囲んでいる。したがって、当例がII式に属するものであれば、鎌部の上方に、その上辺となるべき横方向の区画線が存在するのが普通であるが、そうした表現は認められず、鎌の先端から約7cm上方で、直接、生きた端面に達する。この面は、つぶさに観察すると、わずかに内弯しており、さらに現在は折損しているが、かつては右端に突起がついていた形跡がみられる。通常、鞍形埴輪の背負板の外辺はほとんど直線状にならず、内弯したり、鎌飾りの突起がついたりする。そのように考えると、この面は背負板の外辺の一部とみなすのが妥当であろう。したがって、やはり当例は、背負板と同一平面上に鎌を

描くII式に属すると判断される。II式だとすれば、鎌部を囲む区画線の、少なくとも上辺を欠いた特異な例となる。

そのことについて吟味する前に、鎌の表現と肩かけ紐と思われる梯子状モチーフの円弧について検討しておきたい。まず鎌は、柳葉式に属する。側縁は直線的だが、やや下開き気味である。これと全く同一の形態を呈する例はないが、下開き気味である点に留意すると、関部は左右に突出することが考えられ、鳥舌形の柳葉式鉄鎌(表1左半部—I B b)の退化した表現である可能性がある。次に梯子状モチーフの円弧は、野中例などの肩かけ紐の表現に類似する。しかし、肩かけ紐であるとすれば、これが取りつくべき区画線が認められず、判断に窮する。肩かけ紐であれば鎌部と近い場所に来ることが推測されるが、それにしては裏面の調整技法や突帯の形状があまりにも異なる点が気になる。したがって、本報告書の第2章でも推測したように、筈部の中位や下位に取りつく皮紐の表現である可能性もある。

待兼山遺跡の輦形埴輪について検討を重ねた。不明な点や不確実な点は多いが、現状では、鎌を表現する位置が背負板と同一平面上にあると考えるのが最も合理的である点や、柳葉式の鎌を粗雑に描いている点からII式に属するものと判断しうる。伴出した円筒埴輪の多くが中期後葉に属するとみられる点から、当例もまたこの時期の所産であると考えられるが、このことは前節で考察したII式の存続時期と矛盾しない。

系譜の点に関しては、すでにほとんど使われなくなっていた柳葉式鉄鎌を表現していることから、古市、百舌鳥両占墳群周辺に集中するII式輶形埴輪と共通する要素を持っているといえる。また、梯子状モチーフを用いた円弧の表現がみられることは、前節で検討した野中タイプとのつながりを示している。しかし、鎌部を囲む区画線がみられないことは、当例の独自的な要素であると同時に、鎌の表現形態ともあいまって、II式のなかでもとくに退化した様相を呈していると判断して差しつかえないであろう。そのことはまた、当例の所属時期である中期後葉が、II式輶形埴輪の存在時期のなかでも後半に当たることと関連すると思われる。

線刻技法の觀察 前項で、待兼山遺跡の輶形埴輪が編年上、また系譜上、いかなる位置を占めるかを検討した。本項では、觀察をより細部に及ぼし、鎌および梯子状モチーフの円弧を線刻した「筆跡」を分析し、尖見することのできた野中古墳、茶山1号墳の例と比較することによって、本例の個体的特徴を抽出したい。

まず、鎌を描いた筆跡みてみよう。待兼山例の現存部分には3本の鎌が描かれている。左と中央のものは両側縁を先端部から下部に向かってそれぞれ1本ずつの刻線で表現しているが、この2本の線が先端できちんとつながっておらず、その空隙を補うように短い線でつなぎ形跡がみられる。ことに左のものは先端部の尖りを意識して山形の線を刻んでいる。右のものは両側縁の線が先端部でうまくつながっているにもかかわらず、左や中央のものと同じように、第3筆目を先端部のすぐ右上に浅く小さく刻んでいる。このことから、この輶形埴輪の製

作者は、先端部にたまたま生じた空隙を埋めたというよりも、鉄を3筆で描くというくせを持っていたと考えた方が理解しやすい。また、3つの鉄とも左の側縁より右の側縁のほうが、線刻が深く鋭い。通常、右利きの場合、上から左下へおろす線よりも、上から右下へおろす線のほうが自然に力が入りやすい。したがって、製作者はおそらく右利きであっただろうと推測される。一方、野中古墳の例(図21-8)および茶山1号墳のうち図21-4の例は、鉄の両側縁を先端部から下方へそれぞれ1本ずつの線で描いている点は同様であるが、先端部がきちんとつながらなくても、それを補う線を入れないまま放置している。つまり、この両例の製作者は、鉄を2筆で描くという手法を持っている。両側縁の線刻の深さの差は、野中例では認められないが、茶山1号墳のうち最も右側の鉄は、左より右の側縁の線刻が深い。

次に、梯子状モチーフの円弧の表現をみたい。待兼山、野中、および茶山1号墳の図21-2の個体は、いずれも二重の円のあいだにそれとほぼ直交する短線を並べるという点では同じである。しかし、野中、茶山1号の両例では、二重円に直交する短線群がすべてほぼ平行するとみられるのに対し、待兼山例では、一部平行せず、W字状に並んでいる。前節でみた諸例のうち、梯子状モチーフの円弧のもう1例は、すべてほぼ平行させて描いており、一部W字状に並べるのは待兼山例の大きな個体的特徴であるといえる。さらに、これらの筆跡をみると、待兼山例では、W字状に並べた部分では円弧の外側から内側、内側から外側、外側から内側という手順で、ジグザグに刻み、平行する部分では内側から外側へと刻んでいる。野中例では、確認できる部分においては円弧の外側から内側へと刻んでいる。茶山1号墳では、それと反対に、内側から外側へと放射状に刻んでいる。梯子状モチーフの円弧については、以上のように三者三様の個性を持っている。

以上の観察結果から、すぐにある結論が得られるというわけではない。しかし、つぶさに観察すれば、同様のモチーフを描いても、そこに製作者の個性が表出されていることがわかる。かつて小林行雄氏は、人物埴輪の作風から個々の製作者の問題に迫ったが、¹²⁹⁾輪形埴輪を含む形象埴輪一般についても、今後こうした観点からの詳細な検討が必要となってこよう。

5 まとめ

本論では、墓内出土の輪形埴輪についての編年的考察を試み、とくにそこに描かれた鉄と実物の鉄との形態を比較、検討した。また、待兼山遺跡出土の資料がそのなかにおいて占める位置を考察し、合わせて線刻技法の観察を通じて、当例の個体的特徴、すなわち製作者の個性がいかなる形態で発露されているかを捉えようと試みた。

編年的考察については、今回は鉄部とその周囲の表現方法を中心に試みたが、将来、全体的な形態、施文の形態、調整も含めた製作技法などの検討を通して、多面的に補足、修正していく必要がある。しかし、実物の鉄を箇部の上面に写実的に表現し、全体の大きさも実物の鉄に

近いⅠ式から、すでに衰退の途にあるか消滅している型式の鐵を背負板と同一平面上に粗雑な線刻で描いた小型のⅡ式へという変遷を捉えるということは可能であろう。形象埴輪が写実的なものから象徴的なものへと変化していくことは從来から指摘されているが、本論で考察した輶形埴輪の変化も、これと顕著するものではない。形象埴輪のかかる変化の背景について、小林行雄氏は、「あるものの形を正しく作って、占墳に立てる、という敬虔さから、比率に拘泥せずに、むしろ象徴的に輪郭をとらえたものを作ればよい、という態度への移行」を想定している。⁽³⁰⁾ また、勝部明生氏は、形象埴輪の変化の裏に、古墳祭祀の変化に伴う埴輪自体の意義の質的な変化を読み取っている。⁽³¹⁾

輶形埴輪が写実性を失う過程でとくに重視すべき点は、Ⅱ式輶形埴輪にみられる鐵の表現がきわめて画一的であることと、この形態の鐵が実際には衰退しつつあるか、すでにはほとんど使われなくなっていることである。このことは、著しい小型化や、鐵部周辺の表現方法および施文の退化、省略とあいまって、Ⅱ式輶形埴輪がもはや実物の輶やそれに立て並べた鐵ではなく、それ以前に製作されていた輶形埴輪を直接のモデルとして製作されたことを反映すると考えられる。かつて上田玄範氏は、畿内の形象埴輪にみられる表現の齊一性に着目し、その背景として量産体制に伴う規格の統一化を想定したが、Ⅱ式輶形埴輪における鐵の表現の画一性の背後にも、このような状況が考えられよう。おそらく、埴輪製作工人の専門化、組織化が進展するに伴ない、表現方法のうえで一種の伝統的規制が生じると同時に、量産という必要上から小型化や表現の簡略化が進んだことが、本論で検討した輶形埴輪の写実性の喪失の最も直接的な要因であると考えられる。⁽³²⁾

このような状況が顕在化する一つの時期をⅡ式輶形埴輪の出現をみる中期中葉に求めることができよう。さらに注目すべきは、Ⅱ式輶形埴輪の出土が、当時の最大の埴輪生産中枢であったと考えられる古市、百舌鳥両古墳群周辺に集中するという事実である。形象埴輪の生産体制の問題に関してはまだ十分に深い議論がなされる段階には至っていないが、Ⅱ式輶形埴輪においていえば、埴輪生産の中枢として工人の集中化、組織化がとくに進展していた古市、百舌鳥地域において中期中葉に出現した型式であると推測される。したがって、他地域におけるⅡ式輶形埴輪の動態を把握することは、本論で考えたⅠ式からⅡ式へという輶形埴輪の変遷が他地域でも普遍化できるか否かを決定する手続きであると同時に、他地域の古墳に樹立される埴輪の出自やその生産、流通体制を解明するための糸口となりうるであろう。

後期に入ると、畿内では輶形埴輪の例がきわめて稀になる一方、関東地方を中心に、独自的な形態の輶形埴輪がみられるようになる。それらは奴馬形の外形をもち、長頭式の鐵を立体的に表現するという点で、明らかに畿内における中期の輶形埴輪とは別の系譜に属するものと考えられる。関東地方の輶形埴輪についての詳察は、今回は差し控えるが、それが時期的に先行する畿内のⅡ式輶形埴輪と比べると、再び写実性を取り戻している点が注目される。こうした

点は、今後、いわゆる東国の形象埴輪の成立過程や性格を考えていくうえで、何らかの示唆を与えるものと思われる。

さて、符兼山遺跡出土の軽形埴輪は、北摂地方における軽形埴輪の明確な例としては、大阪府高槻市紅葉山C 3号墳の資料について、わずかに2例目である。前節でも検討したように、当資料は、古市、百舌鳥地域に集中するII式軽形埴輪と同じ系列に属するものであると考えられ、今後、西摂地域と古市、百舌鳥地域との関係を究明していくうえでの有効な資料となりうるだろう。また、線刻技法の検討については、まだ体系化できる段階ではないが、将来、資料の蓄積がすすめば、形象埴輪の生産体制や流通形態を究明するための糸口となる可能性は十分であろう。

形象埴輪の研究、とくにその出現過程や系譜、編年の問題に関する考察は、円筒埴輪に比べて立ち遅れているといえよう。本論で試みたような作業の積み重ねによって、将来、形象埴輪の諸問題を解明することができれば幸いに思う。

(注)

- 1) 勝部明生「軽形埴輪小考」(『横田龍一先生古稀記念 文化史論叢』上巻, 1987年)。
- 2) 川村紀子「埴輪による古墳の編年」(『季刊考古学』第20号, 1987年)。
- 3) たとえば、小林行雄「埴輪」(『陶磁大系』第3巻, 1974年)など。
- 4) 秋山日出雄、綿干善教「奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第18集, 1959年)。
- 5) 京都大学文学部編『京都大学文学部考古学資料目録』2 1968年。
- 6) 勝部明生「軽形埴輪小考」前掲。
- 7) 野上丈助「大阪府の埴輪」I (大阪府立泉北考古資料館改修工事完成記念特別展図録, 1982年)。
- 8) 北野耕平「河内野中古墳の研究」(大阪大学文学部国史研究室研究報告第2冊, 1976年)。
- 9) 野上丈助「大阪府の埴輪」I 前掲。
- 10) 末永雅雄、森浩一「河内黒姫山古墳の研究」(大阪府文化財調査報告書第1輯, 1953年)。
- 11) 川口宏海、白神典之、藤下典之「翁崎遺跡発掘調査報告—第1地区—」(堺市文化財調査報告書第18集, 1984年)。
- 12) 野上丈助「大阪府の埴輪」I 前掲。
- 13) 笠井敏光、森田和伸他「古市遺跡群V」(羽曳野市埋蔵文化財調査報告書9, 1983年)。なお、これらの資料については笠井、森田両氏の御厚意により実見の機会を得た。
- 14) 野上丈助「大阪府の埴輪」I 前掲。
- 15) 第17回埋蔵文化財研究会実行委員会編『形象埴輪の出土状況』(第17回埋蔵文化財研究会資料, 1985年)。
- 16) 調査者によると、主体部兩脊遺物は中期中葉的であるが、墳頂部に置かれた須恵器器台が後半から

木葉に属するものであるという。

- 17) 大阪府八尾市古墳1号墳の資料は梯部周辺を欠失するので、本論では検討の対象としえなかったが、やはり筒部上面を比較的精緻な直弧文で飾り、高さ約180cmを計る大型品であると報告されている。大阪府教育委員会『萱振遺跡現地説明会資料』1983年。
- 18) 都出比呂志氏は梯子状モチーフの表現方法について、縦断面の形態がカタカナの「レ」字状になるものが型式学的に古いことを指摘している。宮川例の梯子状モチーフもこうした形状を呈する。都出比呂志『長法寺南原古墳 III』(大阪大学南原古墳調査団、1983年)。
- 19) 筒部明生『軌形埴輪小考』前掲。
- 20) 都出比呂志『前期古墳の新古と年代論』(日本考古学会第17回例会講演要旨『考古学雑誌』67巻4号、1982年)。
- 21) 後藤守一『静岡県磐田郡松林山古墳発掘調査報告』1939年。
- 22) 内藤晃、田中稔、佐藤精作、大塚初重『三池平古墳』1961年。
- 23) 伊達宗泰、小島俊次他『メスリ山古墳』(奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第35冊、1977年)。
- 24) 宮永雅雄、鳥田暁、森浩一『和泉黄金塚古墳』1954年。
- 25) 梅原末治『山城に於ける古式古墳の調査』(『京都府文化財調査報告』第21編、1955年)。
- 26) ただし、守戸大塚例や、池平例に代表される、頭部の断面形が扁平な長方形を呈するものと、野中例(図22-9)のよう、頭部の断面形が正方形に近い大型品とが、一つの型式学的組列としてつながるものかどうかについては、なお詳細な検討を要する。断面形が正方形に近い頭部を有する鉄錐(表1左半部-II)は、日本では都山氏による前期IV期前後に急増する。筆者はいわゆる長頭式鉄錐の粗型をこれらにもとめることができるという展望をもっている。なお本論で試みた鉄錐の変遷過程の概観については、部分的に見解のことなるところはあるが、田中晋作氏の論考に啓発される点が多くかった。田中晋作『副葬品による編年—武器を中心に—』(『季刊考古学』第10号、1985年)。
- 27) たとえば、兵庫県芦屋市会下山遺跡、大阪府河内長野市大師山遺跡などにこの種の鉄錐の類例があり、古墳時代前期前半の例としては、京都府椿井大塚山古墳の出土資料などがある。村川行弘、石野博信、森岡秀人『椿井大塚山遺跡』1983年。
- 綱下善教他『河内長野大師山—大師山古墳・大師山遺跡発掘調査報告』(関西大学文学部考古学研究第5編、1977年)。
- 近藤義郎他『椿井大塚山古墳』1986年。
- 28) 古墳時代初期の例としては椿井大塚山古墳、長野県松本市弘法山古墳などの資料がある。斎藤忠他『弘法山古墳』1978年。
- 29) 小林行雄『埴輪』前掲。
- 30) 小林行雄『埴輪』前掲。

- 31) 小林行雄「埴輪」前掲。
- 32) 勝部明生「輦形埴輪小考」前掲。
- 33) 上田宏範「埴輪の諸問題」(『世界考古学体系』第3巻 日本III, 1959年)。
- 34) たとえば、神奈川県湘戸ヶ谷古墳出土例など。
- 永峯光一、水野正好編『土偶・埴輪』(日本原始美術大系第3巻, 1977年) 図版228。
- 35) 原口正三他「高槻市史」第6巻 考古編, 1973年。
- 36) ただし、豊中市教育委員会柳本照男氏、山元達氏の御教示によれば、同市大石塚古墳、大塚古墳、御獅子塚古墳などにおいて輦形埴輪の一部である可能性がある埴輪片が出土しているという。
その他の参考文献)
 - ・伊東信雄、伊藤玄三「会津大塚山古墳」(会津若松市史別巻, 1964年)。
 - ・網干善教「五条猫塚古墳」(奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第20号, 1962年)。
 - ・上田宏範、中村春寿「櫻井茶臼山古墳附櫻山古墳」(奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第19号, 1961年)。
 - ・小林謙一「弓矢と甲冑の変遷」(『古代史発掘』6 古墳と国家の成立ち, 1975年)。

第6章 総 括

今回の調査はいずれも遺構の中心部分が破壊された後の、周縁部に残された斜面堆積の発掘ではあったが、いくつかの重要な新知見を明らかにすることができた。その詳細については既に各章で述べたとおりであるが、もう一度ここで要点を整理しておくことにする。

1 テニスコート地点および橢円形研究センター地点において、占墳時代中期後半～中期末の小古墳の存在を確認した。同じ尾根上に時期差をもって造営された二つの古墳は、丘陵下の猪名川左岸平野を生産基盤とする首長層が世代を繰りて築いた墳墓と考えられる。同時期の平地部に展開する桜塚古墳群との関連なども含めて、この地域の重層的な集団関係を解明するための重要な事例である。

2 円筒埴輪、形象埴輪、須恵器などが出土し、その編年的研究を進める上で新しい資料を提供した。このうち円筒埴輪は、当地域におけるこれまでの時期的な空白部分を埋めるものとして注目される。また、輦形埴輪は淀川以北では数少ない資料として貴重である。

3 テニスコート地点では、弥生土器が出土し、遺跡の立地からみて高地性集落の存在を考えることができる。キャンパス内では弥生時代の高地性集落は1983年の調査(ラジオ・アイソトープ総合センター地点、弥生中期)に統いて2例目の確認であり、西から大阪平野に入る際のいわばのど見下ろすこの丘陵が軍事的に重要なポイントであったことを物語っている。近年の研究によれば、高地性集落は弥生中期後半、後期後半の二時期に存在のピークがあることが明らかになっており、今回のものは後者にある。土器の中には播磨地方の影響を受けたと考えられるものがみうけられ、それがこうした高地性集落に持ち込まれている点は注目される。

4 今回の発掘調査では、奈良、平安時代や中世の遺物も少量ながら出土している。このほかにもキャンパス内では各所で遺物が確認されており、待兼山遺跡が様々な時代にわたる複合遺跡の性格を持っていることがより濃厚になってきたといえる。今後とも豊中キャンパス内の建設工事などに際しては、文化財に対する慎重な配慮が求められるとともに、吹田キャンパスやその他の大阪大学所有地についても今後計画的な分布調査の実施等を考慮する必要がある。

この待兼山丘陵では弥生時代から現在に至るまで数千年の長きにわたり、人々が狩猟をし、生活し、墓をつくり、様々な活動を繰り返して、その痕跡を地面に刻み続けてきた。いま、その丘陵上に不動のものとして林立する大阪大学の建物群とともに決して不变不滅の存在ではあるまい。ながい歴史の流れから見るとほんの瞬時における建物建設工事などによって、過去の人間活動の痕跡が調査もされず永遠に間に紛れることはぜひとも避けなくてはならない。そこがこれからの我が国の歴史を担う人々の集う学問の府であればなおさらのことであろう。

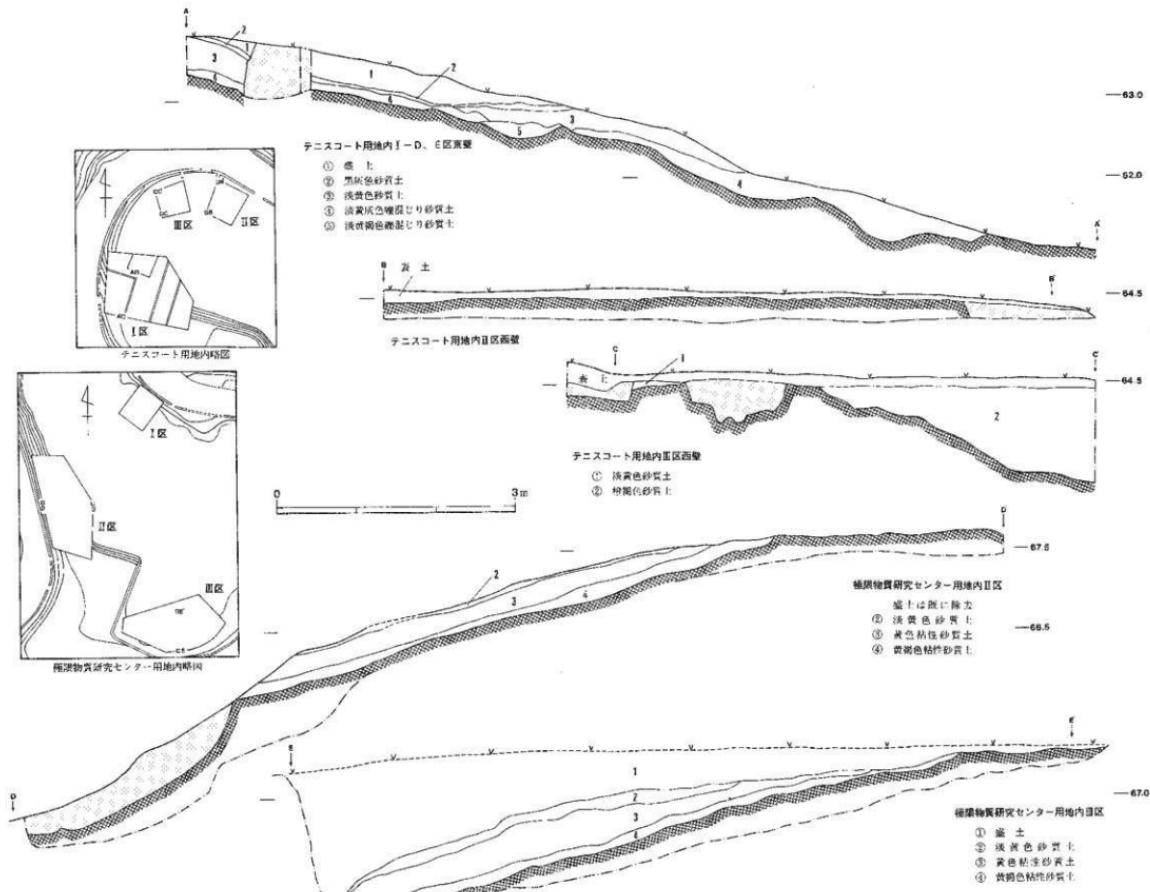


図23 上層断面集成図(アミ目は擾乱を示す)



図24 調査区全体図(アミは極限物質研究センター地点の試掘トレンチを示す)

MACHIKANEYAMA SITE II

A Report of 1987 Excavations at Archaeological Sites
in Osaka University Campus

Editor: FUKUNAGA Shinya
Contributors: AOTANI Naomi
FUKUNAGA Shinya
MATSUGI Takehiko
TSUDE Hiroshi

March 1988

Research Committee on Archaeological Sites
in Osaka University Campus (RCASOUC)
Osaka University, Japan

CONTENTS

- Chapter 1 Progress of research
 2 Excavation preceding the tennis court construction
 3 Excavation preceding the construction of the
 Research Center of Extreme Materials
 4 Archaeological sites in the campus of Osaka University
 5 Typological studies of arrow-container shaped *haniwas*
 in the *Kinai* district
 6 Conclusion
 Appendix English Summary

PLATES

- 1 1 View of the Toyonaka campus of Osaka University under construction
 in 1962
 2 View of the Toyonaka campus in 1963. A; The location for the con-
 struction of the tennis court (LTC site). B; The location for the con-
 struction of the Research Center of Extreme Materials (LRCEM site)
 2 1 View of the Machikaneyama hill and surrounding area
 2 View of the LTC site before excavation
 3 1 Panoramic view of Location I at the LTC site (from the west)
 2 Stratigraphy of the east section of Location I-E of the LTC site
 3 Stratigraphy of the north section of Location I-E of the LTC site
 4 1 Panoramic view of Location II at the LTC site
 2 Panoramic view of Location III at the LTC site
 3 *Haniwa* terracotta in situ at the LTC site(1)
 4 *Haniwa* terracotta in situ at the LTC site(2)
 5 1 View of the LRCEM site before excavation
 2 Stratigraphy of Location III of the LRCEM site
 6 1 View of Location II at the LRCEM site (from the north)
 2 Stratigraphy of Location II at the LRCEM site (from the south)
 7 1 *Haniwa* terracotta in situ in Location II at the LRCEM site (1)
 2 *Haniwa* terracotta in situ in Location II at the LRCEM site (2)
 8 1 Cylindrical *haniwas* at the LTC site (1)
 2 Cylindrical *haniwas* at the LTC site (2)
 9 1 Cylindrical *haniwas* at the LTC site (3)
 2 Cylindrical *haniwas* at the LTC site (4)
 10 1 Cylindrical *haniwas* of *asagao* type at the LTC site
 2 *Haniwa* of house shape at the LTC site
 11 1 *Haniwa* of arrow-container shape at the LTC site
 2 *Haniwa* of arrow-container shape at the LTC site (reverse side)
 12 1 Yayoi pottery: cooking vessels
 2 Yayoi pottery: rim of cooking vessels

- 13 1 Yayoi pottery: bottoms of jars and vessels
- 2 Yayoi pottery: stands and pedestalled dishes
- 3 Stone implements: side A
- 4 Stone implements: side B
- 14 Cylindrical *haniwas* at the LRCEM site (1)
- 15 1 Cylindrical *haniwas* at the LRCEM site (2)
- 2 Cylindrical *haniwas* at the LRCEM site (3)
- 16 1 Details of cylindrical *haniwas*
- 2 Miscellaneous finds in the Toyonaka campus of the University

FIGURES IN TEXT

- 1 Distribution map of archaeological sites around the Machikaneyama hill
- 2 View of the excavation at the location for the construction of a tennis court (LTC site)
- 3 On-the-spot presentation of the excavation results at the LTC site
- 4 View of the LTC site after the excavation
- 5 Professor Kumagai, the president of Osaka University, attending the on-the-spot presentation
- 6 Plan of the excavation area at the LTC site
- 7 Scale drawings of cylindrical *haniwas*
- 8 Scale drawings of *haniwas* of house shape and arrow container shape
- 9 Scale drawings of *sue* ware and rubbings of their surface decoration
- 10 Scale drawings of Yayoi pottery
- 11 Scale drawings of stone tools
- 12 Plan of excavation area at the location for the construction of the Research Center of Extreme Materials (LRCEM site)
- 13 Dish-shaped pit at Location III
- 14 Scale drawings of cylindrical *haniwas*
- 15 Scale drawings of *sue* ware and *gaki* ware
- 16 Scale drawings of a stone arrowhead
- 17 Topographical map of a burial mound in College of Bio-Medical Technology campus
- 18 Distribution map of archaeological sites in the Toyonaka campus
- 19 Scale drawings of miscellaneous finds in the Toyonaka campus
- 20 Scale drawings of arrow-container shaped *haniwas* in the *Kinai* district (1)
- 21 Scale drawings of arrow-container shaped *haniwas* in the *Kinai* district (2)
- 22 Scale drawings of arrowheads
- 23 Stratigraphical profiles of the excavation
- 24 Plan of the whole excavation area

TABLE

- 1 Comparison of arrowheads with depicted arrowheads on *haniwas*

SUMMARY

1) Machikaneyama site is situated on a low hill, Machikaneyama, on the Toyonaka campus of Osaka University, located in the northern part of Osaka prefecture. We have conducted several seasons of rescue excavation, in advance of the construction projects on the campus, since 1982.

This report accounts for the results of two seasons work in 1987; the excavation of the 5th and 7th season.

Through our survey, the following important points have been clarified.

2) The 5th season excavation was conducted in advance of the construction of a tennis court in the southern part of the campus. The site was located on the western end of an east-west ridge of the hill. We found many potsherds of the Yayoi period in the deposits accumulated on the hill slope: storage jars, cooking vessels, pedestal dishes, bowls, and stands. Analysis these potsherds, we can demonstrate that they belong to the latest phase of the Yayoi period, which dates back to as early as the 3rd century AD. These finds seem to have moved there from the upper part of the hill, where a settlement of the Yayoi period probably existed.

3) It is noteworthy that the settlement is located on the upper part of the hill at an elevation of some 65 meters above sea level, with a relative height of some 50 meters above the nearest plain. We found in the 1983 excavation, nearly the same type of site belonging to the middle Yayoi period, on the eastern tip of the Machikaneyama-hill. These results indicate that the Machikaneyama-hill was inhabited by people from the middle to the latest phase of the Yayoi period. In this period, we usually find two types of settlement, one located on alluvial plains and the other on the hill tops. Machikaneyama settlement belongs to the latter, presumably developed as a defence settlement on a hill top.

4) We found, in the same deposits, numerous fragments of *haniwa*, a kind of ritual terracotta for tumuli in the Kofun period. Analyses of these *haniwa* fragments reveal that most of them belong to a cylindrical *haniwa* and that other small part of *haniwa* fragments belong to *haniwas* shaped like a house, a canopy, and an arrow container. Chronological studies showed these *haniwas* to belong to the later part of the 5th century AD. These finds indicate there was probably a tumulus in the past, which may have been destroyed by the construction of barracks for the U.S. forces stationed here immediately after World War II. Judging from the topographical features of the site, the tumulus must have been of a small scale, say, a mound with a radius of some 10 meters.

5) The 7th season excavation was carried out from June to July 1987, at the location some 100 meters east of the above mentioned site. The university planned there the construction of the Research Center of Extreme Materials.

The site is located on a hill top at an elevation of some 70 meters above sea level. In the deposits accumulated on the hill slope, we obtained some fragments not only of *haniwa* but *sue ware*, a kind of kiln-made pottery in the Kofun period. These artifacts belong chronologically to the latest phase of

the 5th century. It is a great pity that the upper part of the hill, where may have been a tumulus in the past, was totally scraped out by the same construction as mentioned above.

6) The 6th season excavation was conducted in April 1987, in the center of the campus, where the Faculty of Letters planned the Department of Japanology building. We found there little evidence of archaeological features except the deposits rich in humus which indicated some remains nearby. These three seasons of excavation have provided us with much information with which to reconstruct in detail the distribution of settlement sites and tumuli on Machikaneyama-hill area.

図 版



1 造成中の豊中キャンパス(1962年)



2 調査地点の現状(1963年 西から A テニスコート地点, B 極限物質研究センター地点)



1 テニスコート地点からの眺望(南方方向)



2 テニスコート地点調査前の状況



1 テニスコート地点 I 区全景(西から) 2 I-D 区東壁土層 3 I-D 区北壁土層



1 テニスコート地点Ⅱ区全景 2 Ⅲ区全景 3、4 遺物出土状況



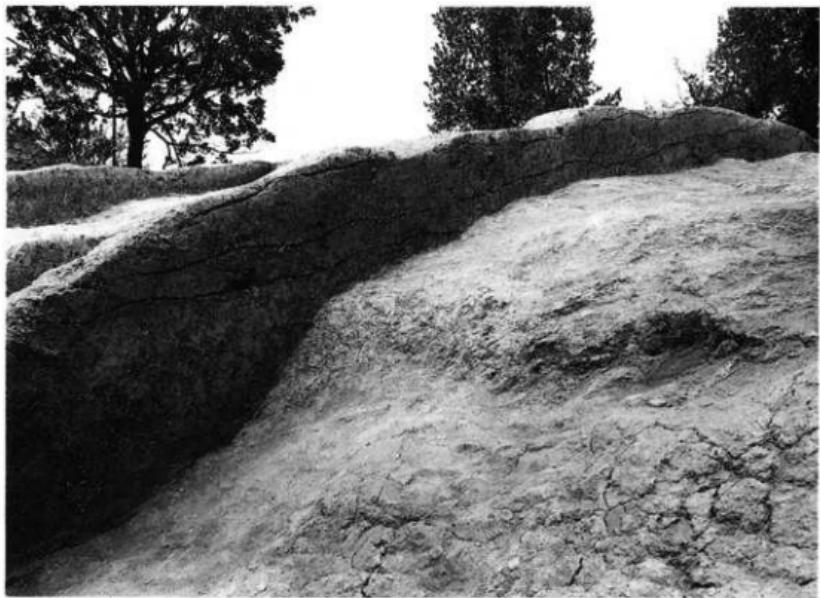
1 極限物質センター地点調査前の状況



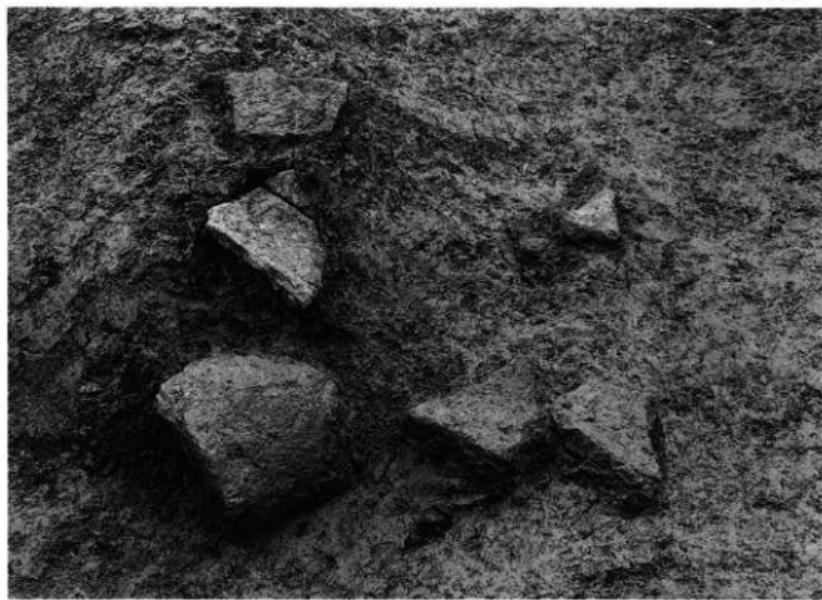
2 極限物質センター地点田区南北断面(東から)



1 極限物質センター地点II区(上方はテニスコート地点)



2 極限物質センター地点II区東西断面(南から)



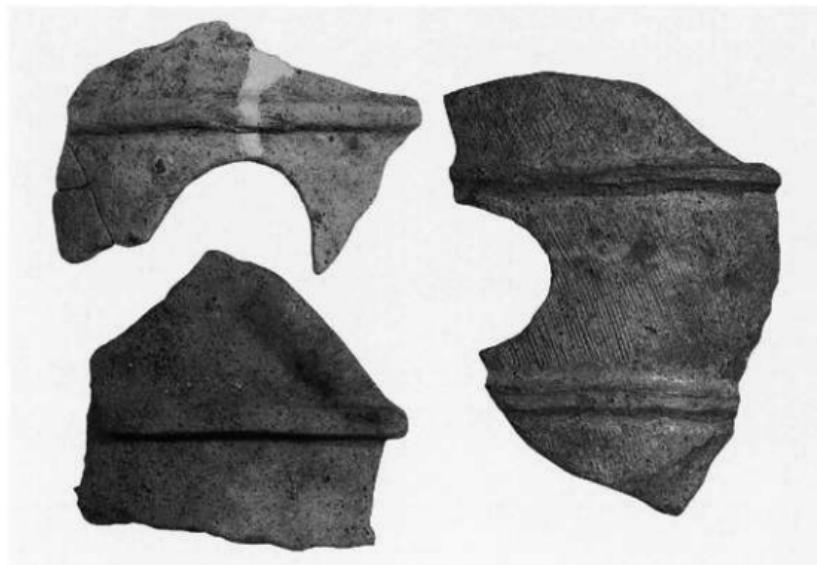
1 極限物質センター地点II区円筒埴輪出土状況



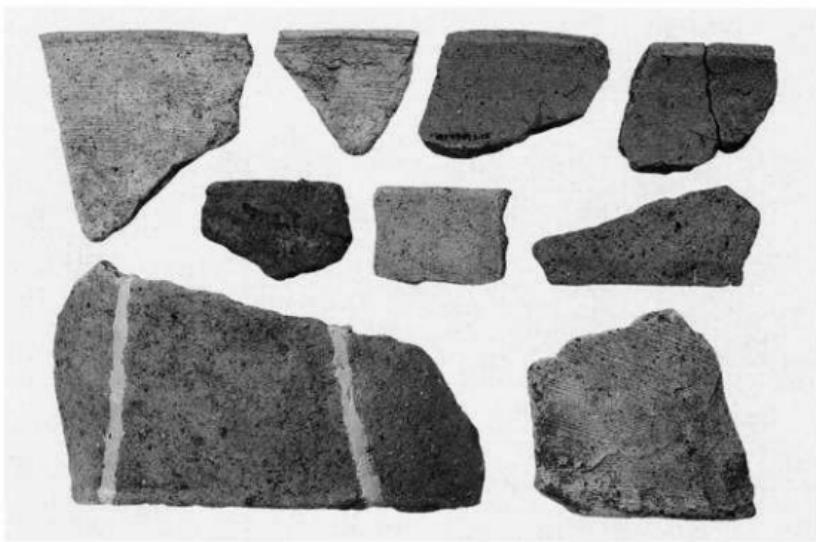
2 同 上



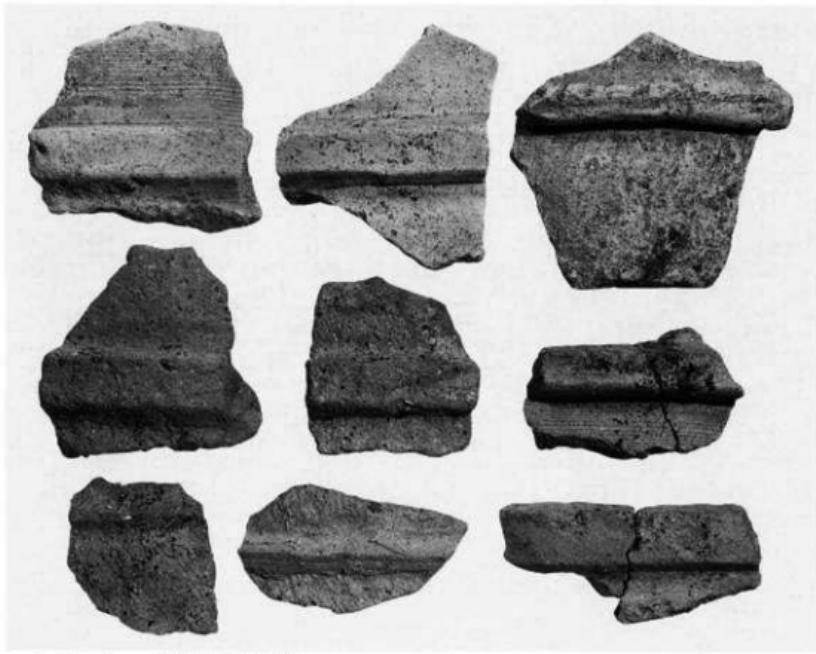
1 テニスコート地点円筒埴輪(1)



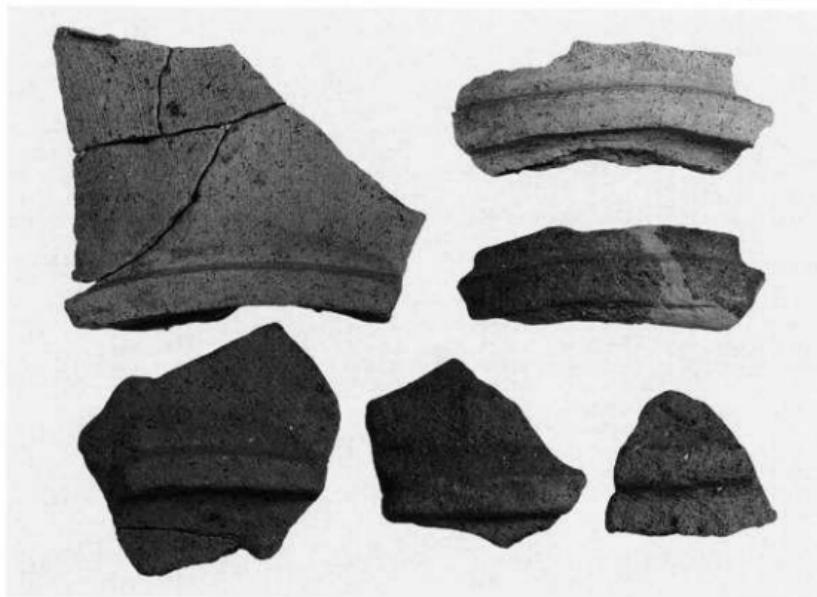
2 テニスコート地点円筒埴輪(2)



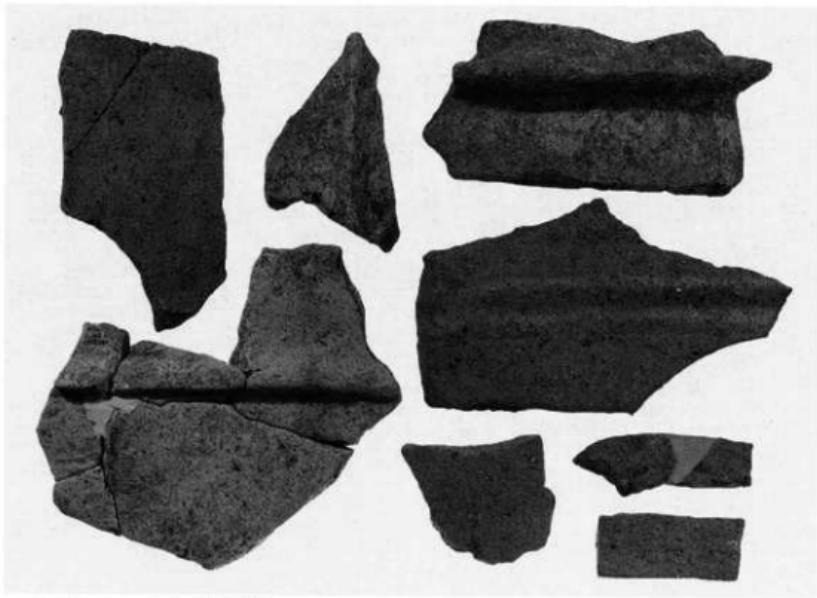
1 テニスコート地点円筒埴輪(3)



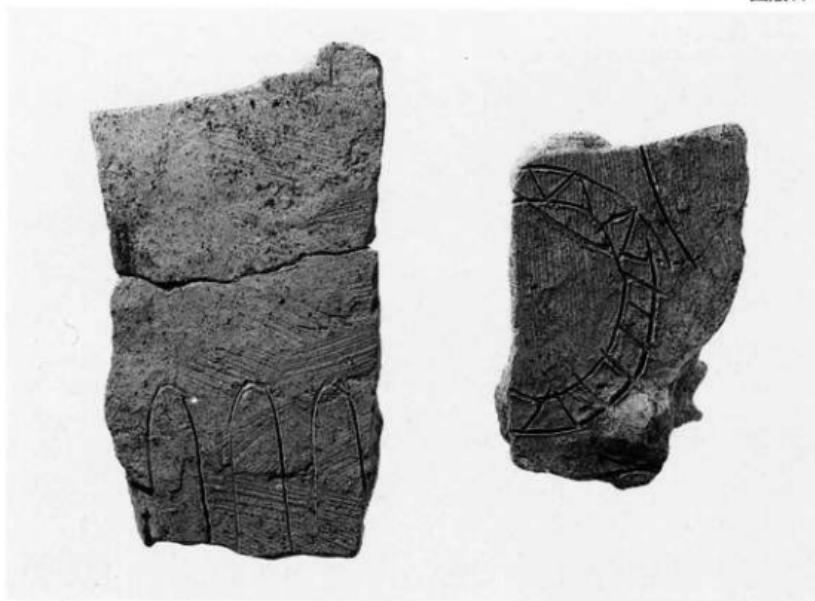
2 テニスコート地点円筒埴輪(4)



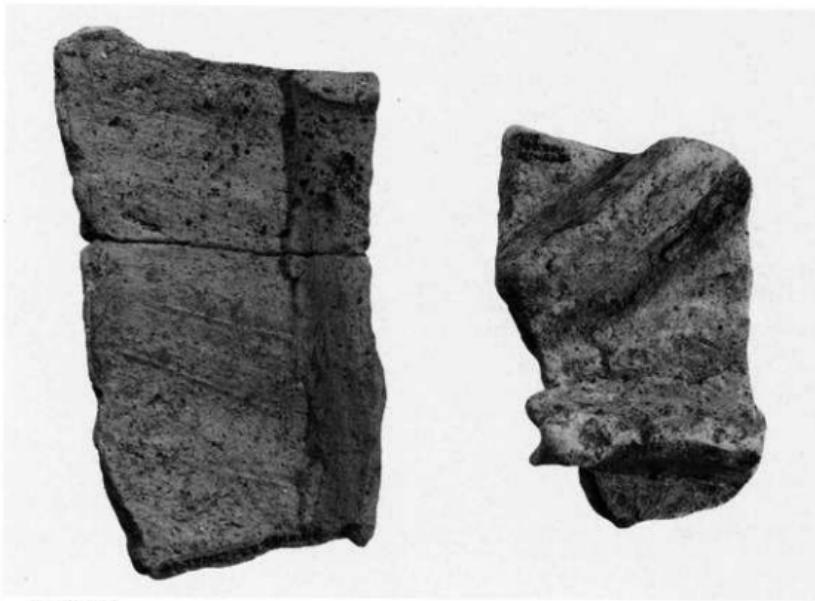
1 テニスコート地点朝顔形円筒埴輪



2 テニスコート地点家形埴輪



1 テニスコート地点鶴形埴輪



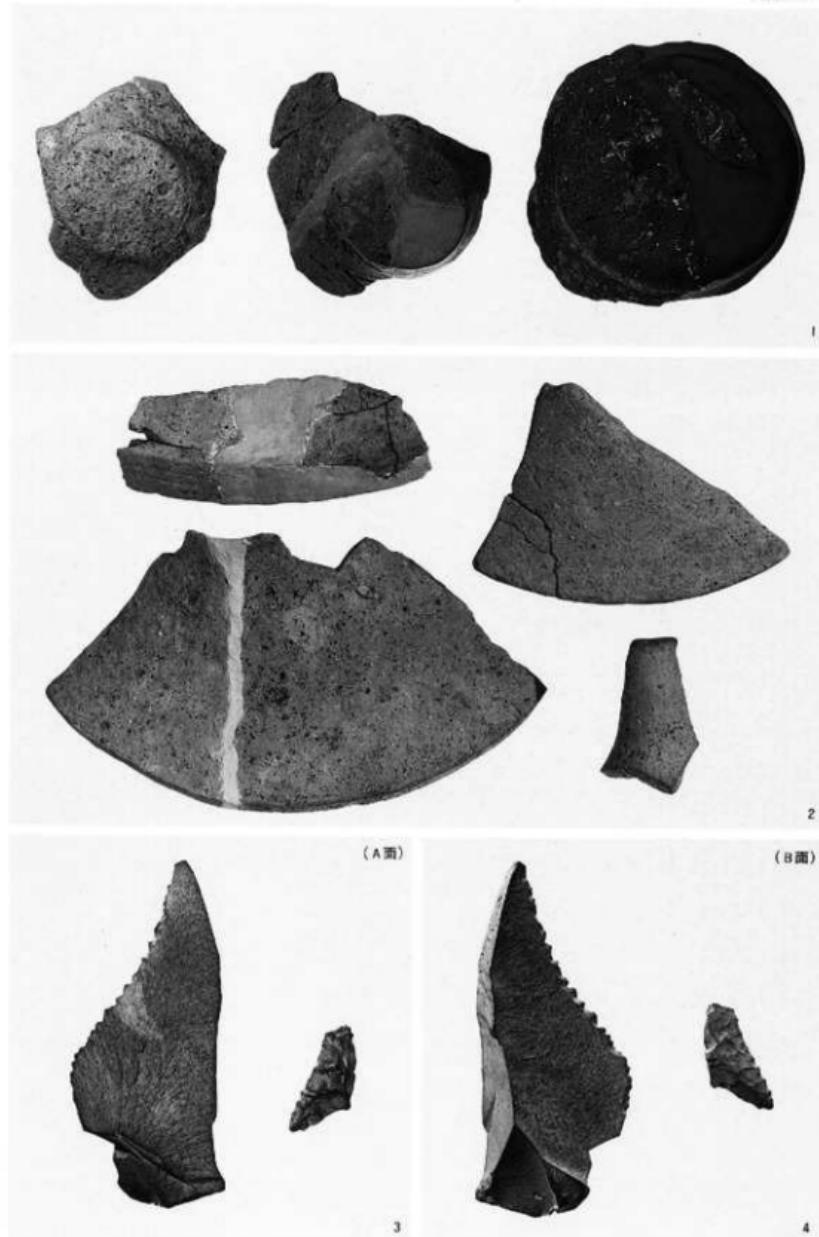
2 同裏面



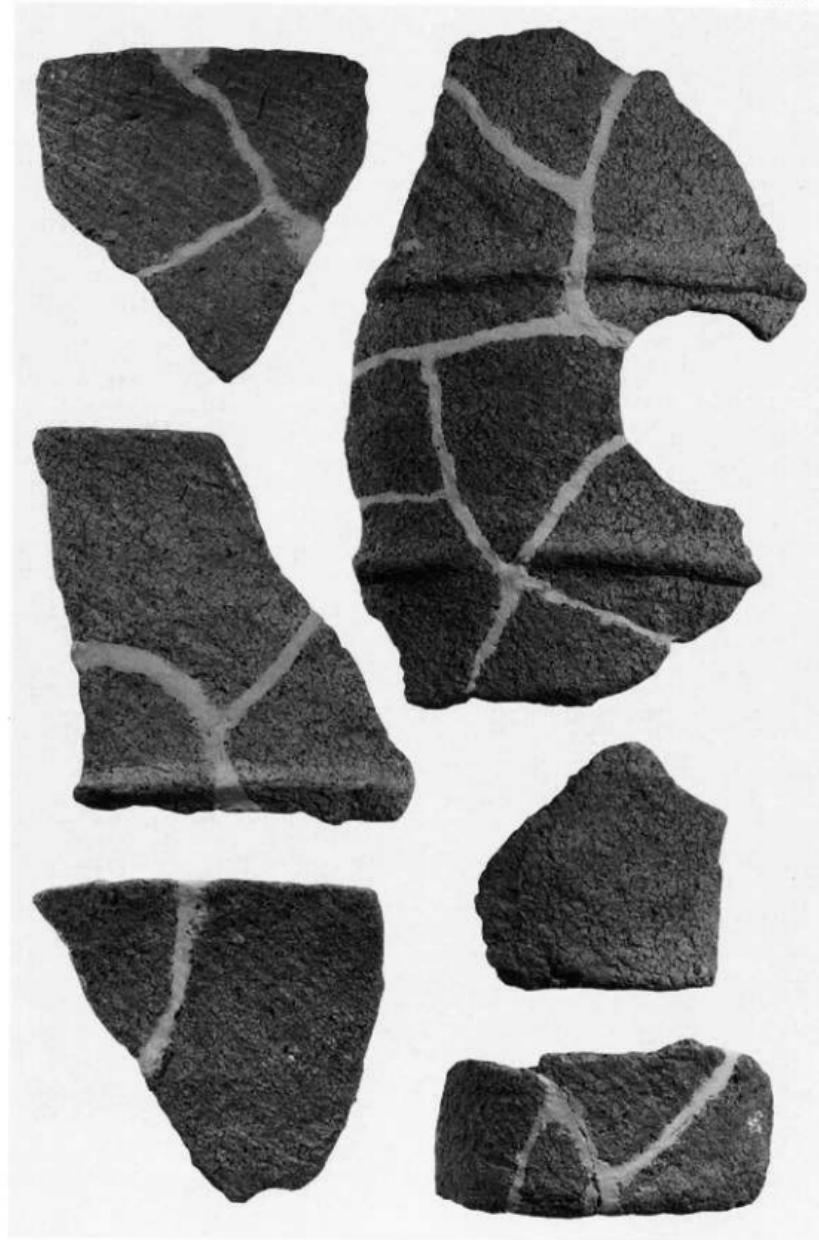
1 テニスコート地点弥生土器(底)



2 同口縁部



1、2 テニスコート地点弥生土器(底部、器台、高杯) 3、4 テニス、極限両地点の石器



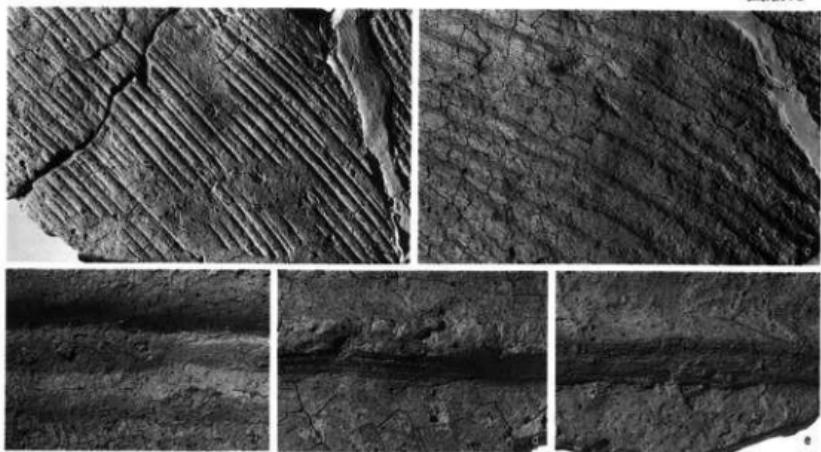
極限物質センター地点円筒地輪(1)



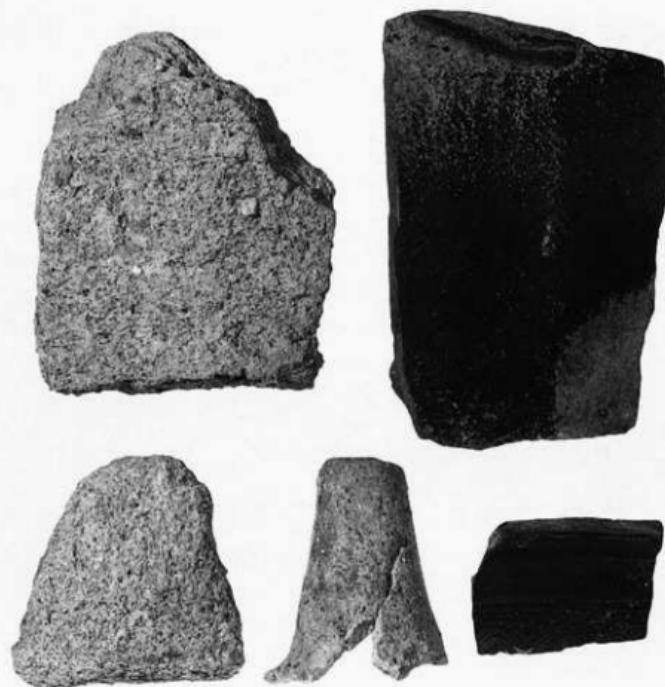
1 極限物質センター地点円筒埴輪(2)



2 極限物質センター地点円筒埴輪(3)



1 円筒埴輪細部(実大)



2 豊中キャンバス内採集遺物

待兼山遺跡 II

1988年3月発行

編集 大阪大学埋蔵文化財調査委員会
発行 委員長 黒田俊雄
大阪府吹田市山田丘1番1号

印刷 有限会社 真陽社
京都市下京区油小路仏光寺上ル

MACHIKANEYAMA SITE II

A Report of 1987 Excavations at Archaeological Sites
in Osaka University Campus

Editor: FUKUNAGA Shinya
Contributors: AOTANI Naomi
FUKUNAGA Shinya
MATSUGI Takehiko
TSUDE Hiroshi

March 1988

Research Committee on Archaeological Sites
in Osaka University Campus (RCASOUC)
Osaka University, Japan